

福島県文化財調査報告書第110集

関和久上町遺跡Ⅰ

—史跡指定調査概報—

1983年3月



福島県教育委員会



序 文

江戸時代の地誌である白河風土記には借宿の地より古瓦が出土し、この地を白河軍団跡とされており、大正末年には関和久からも奈良時代の瓦が出土することが知られ、故岩越二郎氏により学界に紹介されました。その後、借宿については寺院跡であることが判明し、一部は県史跡に指定されました。また関和久をもって神亀5年設置の白河軍団跡とする説も提出されました。

県教育委員会は、関和久遺跡の重要性に鑑み、文化庁、研究者の方々のご助言を得て、昭和47年より10年間、遺跡の範囲と性格を確認する調査を行い、古代白河郡家跡であることが判明し、国史跡指定のはこびとなっております。

本遺跡は、かつて関和久の一部と考えられておりましたが、関和久遺跡が郡家跡と判明したため、その関連の「関和久上町遺跡」として今年度より5ヶ年計画で調査を開始いたしました。

本年度は、その第1年度として、上町地内の一部を調査し、所期の目的を達することができました。ここに本年度の調査成果につきまして、その概略を報告いたします。

本報告書が広く県民の方々に認識を深めていただくとともに、研究資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

最後に、この調査のご指導をいただきました県文化財保護審議会委員伊東信雄博士はじめ各指導委員、宮城県多賀城跡調査研究所、泉崎村、泉崎村教育委員会、地元協力者各位に深く感謝の意を表すものであります。

昭和58年3月

福島県教育委員会

教育長 邊 見 榮之助

例 言

1. この事業は国庫補助による事業である。
2. 本報告書は関和久上町遺跡調査5ヶ年計画の第1年次目の概報である。
3. 発掘調査の基準点は関和久遺跡B MNo.1 より移動した原点 (N 630.5m ・ E 693.5m) を用い関和久遺跡B MNo.1 からの東西・南北の距離として記述した。
4. 本遺跡は全国遺跡地図—福島県— (1974文化庁) の関和神社遺跡 (38—89)、関和神社下遺跡 (38—90)、高福寺跡 (38—91)、上町遺跡 (38—92) を一括して関和久上町遺跡としたものである。
5. 瓦の分類は第2表の基準によるものとする。
6. 土器のロクロ調整杯は付表1の分類を用いるものとする。
7. 執筆分担は以下の通りである。
 第1章第1節・第2節木本 第2章第1・2節・木本 第3節・辻
 第3章第1節・第2節SI01~05・第4節・木本 第3節・渡辺 第2節・SI06・07・氏家
 第4章第1・4節・木本 第2・3節・辻
8. 土壌分析は東北大学農学部土壌立地研究室 庄子貞雄氏に依頼した。
9. 本報告書の編集は木本が担当した。

付表1 ロクロ整形杯形土器分類表

再調整	切り離し	類別	再調整	切り離し	類別	
回転ヘラ削り (体下部+底部) 	不明	1 類	回転ヘラ削り (一部) 	回転ヘラ切り	3 a 類	
	回転ヘラ削り	1 a 類		回転糸切り	3 b 類	
	回転糸切り	1 b 類		静止糸切り	3 c 類	
回転ヘラ削り 	静止糸切り	1 c 類	手持ちヘラ削り (一部) 	回転ヘラ切り	4 a 類	
	手持ちヘラ削り (体下部+底部) 	不明	2 類		回転糸切り	4 b 類
		回転ヘラ切り	2 a 類		静止糸切り	4 c 類
手持ちヘラ削り 	回転糸切り	2 b 類	再調整なし 	回転ヘラ切り	5 a 類	
	手持ちヘラ削り 	静止糸切り	2 c 類		回転糸切り	5 b 類
		不明	2 類		静止糸切り	5 c 類

第2表 ロクロ整形杯形土器分類表

調 査 要 項

1. 名 称 関和久上町遺跡
2. 所 在 地 西白河郡泉崎村大字関和久字上町、字関和神社、字漆久保
3. 調 査 主 体 福島県教育委員会
4. 指 導 委 員 伊東信雄、坪井清足、梅宮 茂、岡田茂弘、佐藤宏一
5. 調 査 担 当 木本元治
6. 調 査 員 渡辺一雄、鈴木 啓、渡部正俊、辻 秀人、藤原妃敏、森 幸彦、佐藤友幸
氏家浩子、六戸美智子、柳田俊雄、仲田茂司、佐久間光平、長田公雄
7. 指 導 ・ 協 力 桑原滋郎、進藤秋輝、庄子貞雄、後藤忠俊
8. 調 査 協 力 泉崎村、泉崎村教育委員会、泉崎公民館、宮城県多賀城跡調査研究所、白河
市歴史民俗資料館、根本信孝、金子誠三、穂積国夫、松山富夫、鈴木光信、
佐川一二、岡部博道、緑川直衛、緑川浅次郎、鈴木兵作、小林常好、円谷正
雄、兼子幸子、木野内カツ、佐川トシ子、田崎タイ、田崎ツネ、緑川トシヨ

目 次

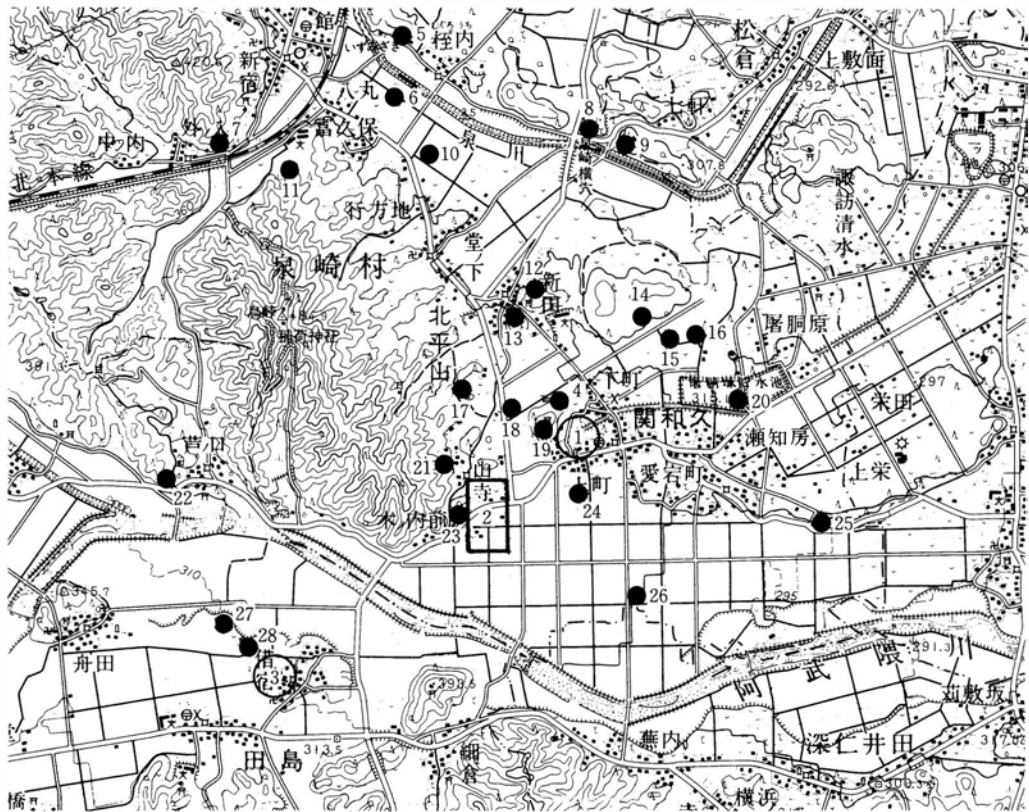
序 文	福島県教育委員会教育長 邊見 榮之助
第1章 遺跡の環境	1
第1節 位置と地形	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査経過	4
第1節 過去の調査	4
第2節 調査日誌	5
第3節 既出土瓦	6
第3章 遺構と遺物	19
第1節 建物跡	19
第2節 堅穴住居跡	20
第3節 工房跡	37
第4節 土塁・溝跡・井戸跡	44
第4章 考 察	47
第1節 土 器	47
第2節 瓦	48
第3節 遺 構	49
第4節 ま と め	51
付 章 土 壌 分 析	53

第1章 遺跡の環境

第1節 位置と地形

本遺跡は東北本線泉崎駅の南東3kmの西白河郡泉崎村大字関和久字上町、上関和神社下地内に位置しており、南方約2kmを阿武隈川が流れている。

遺跡周辺は、那須山系に水源を發し東流する阿武隈川が大きく北に向きを変える部分の約4km程上流となっている。阿武隈川は白河市街地付近までは流域に狭長な河谷平地を形成しながら流れてくるが、市街地の途切れた搦目付近から下流では流域を広げ平坦な段丘面も広がる。さらに関和久遺跡西方500mの木内山、借宿廃寺跡東方1kmの人忘不山が相對する部分で幅1kmと狭くなり、そこから下流に向って流域幅を広げ、遺跡附近では段丘により形成された流域の平坦面は南北幅約2kmとなり、そのまま東に向い、遺跡の南東約5kmで大きく北に流れを変える。遺跡付近下流約10kmにわたり、幅2km程の平坦面が流域に形成されており、その最上流部つまり流域



第1図 関和久町周辺の遺跡

の平坦面の一番奥の部分に本遺跡を含む遺跡群が位置する形となっている。

遺跡の位置する面は阿武隈川河床面から約7mの比高を有する付近では一番高い4段目の段丘面上に位置しているが、関和神社下の地点の一部は丘陵の斜面となっている。本年度調査地点と高福寺跡地点、関和神社下地点の間には狭長な開折谷が北方から入り込み、現在は水田となっている。さらに、本遺跡の西と北には関和神社のある丘陵があるため、西と北が丘陵に区画され、東と南が流域の平地に向って開いた明るい開地形の地形となっている。

第2節 周辺の遺跡

本遺跡は、郡家跡である関和久遺跡と並んで、律令時代の白河郡の中心付近に位置している。律令時代の白河郡は、現在の白河市、西白河郡、東白川郡、石川郡を含む範囲であり、本遺跡の周辺は、その中でも重要な遺跡が多く分布している地域である。

旧石器時代では、関和久遺跡からナイ形石器が1点出土しているのみであり、その地は阿武隈川をはさんで離れている東村谷地前C遺跡、石川町上悪戸遺跡があるのみである。縄文時代の遺跡も、八雲神社遺跡(12)など数遺跡が見られるのみで、あまり多いとはいえない。

弥生時代の遺跡としては、上野館遺跡(18)、日渡前遺跡(6)など5遺跡が見られる。このうち、上野館遺跡出土のものは、弥生時代中期初頭と考えられるもので、この地域の農業経済社会の成立を考える上で、興味深い資料である。また、地図範囲外であるが、西方約6kmには弥生後期、天王山式の標式遺跡となった天王山遺跡がある。

古墳時代になると、遺跡が多く見られるようになる。遺跡の北西約5kmには、かつて力士形埴輪を出土し、昭和56年の調査では、「盾を持つ人」、「琴を弾く人」、「鳥」など、多くの形象埴輪を出土した原山1号墳を含む古墳群、西南西2.5kmの阿武隈川対岸には、盾形埴輪を出土した下総塚古墳、石枕を出土した田島銀蔵古墳群があり、半径1kmの範囲でも、愛敬山古墳群、東山古墳、石塚古墳、集落跡である古内遺跡などが見られる。また、北方2kmには、史跡泉崎装飾横穴を含む横穴群があり、県内でも有数の古墳が分布している地域といえよう。

律令時代の遺跡では、南西約600mに白河郡家跡である関和久遺跡があり、本遺跡は、この関和久遺跡と同じ瓦を出土しており、大正15年の岩越氏の本遺跡の発見が、関和久遺跡発見のきっかけともなっている。また、出土瓦、土器からして、両遺跡は、奈良～平安時代に並行して存在していたものと考えられ、この両者の関連を探るのも、今年からの調査の目的である。さらに関和久遺跡の南西1.5kmの阿武隈川の対岸には、県指定史跡借宿廃寺跡がある。ここからは、関和久遺跡と同じ瓦、埴輪等が出土しており、白河郡家に附属する寺院跡と考えられ、この近辺が律令時代の白河郡の中心であったことは、まちがいないと考えられる。

さらに、阿武隈川の対岸5～10kmの、東村から石川町にかけての丘陵地区には、この時代の、

大規模な集落群が展開していることが、近年の調査で知られるようになった。

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡地区	遺 跡 名	時 代	性 格
1	38-89~92	関和久上町遺跡	奈良～平安	官 衛 ？
2	38 - 87	関和久遺跡	〃	郡 家 跡
3	38-69・70	借宿廃寺跡	〃	寺 院 跡
4	38 - 88	関和久窯跡	平 安	瓦 窯 跡
5		桎内前遺跡	縄 文	散 布 地
6		日渡山遺跡	弥 生	〃
7		外ノ内遺跡	土師器散布地	土師器散布地
8	38-13(央)	泉崎横穴	古 墳	装 飾 横 穴
9		泉崎窯跡		須 恵 窯 跡
10		都橋四ッ塚古墳	古 墳	円 墳 ？
11		小林山古墳群	〃	円 墳 群
12	38 - 77	東山古墳	〃	円 墳
13		北平山瓦窯跡		瓦 窯 跡
14	38 - 93	八雲神社遺跡	縄 文	散 布 地
15	38 - 94	石名沢遺跡	〃	〃
16	38 - 95	新林遺跡	弥 生	〃
17	38 - 81	葉師堂遺跡	縄文・奈良？	〃
18	38 - 83	上野館遺跡	弥生・中世	包含地・館跡
19		伊賀館跡	中 世	館 跡
20	38 - 96	愛敬山古墳	古 墳	円 墳
21	38 - 85	古内遺跡	〃	集 落 跡
22	38 - 44	谷地久保古墳	奈 良 ？	火 葬 墳
23	38 - 86	大網堂跡	中 世	寺 院 跡
24		剣宮遺跡	奈良～平安？	散 布 地
25	38 - 97	庭渡神社遺跡	縄 文	〃
26	38 - 99	石塚古墳	古 墳	
27	38 - 66	下総塚古墳群	〃	前方後円墳
28	38 - 67	田島銀蔵古墳群	〃	円 墳

第2章 調査経過

第1節 過去の調査

本遺跡及び関和久遺跡が古瓦出土地として紹介されるようになったきっかけは、大正15年3月14日故岩越二郎氏が高福寺跡で重弧文軒平瓦第一類を発見した。この点は岩越氏の「西白河郡烏峠附近の遺跡、遺物に就いて」、「関和久遺跡Ⅰ」に詳しい。

岩越氏の前出報文によれば、その後昭和10年8月には関和神社下の地点から、11月10日には県道の南側からも古瓦が出土することを確認している。同23日には故内藤政恒氏を岩越氏が案内し、本遺跡と関和久遺跡を訪ね、内藤氏は昭和13年に発表した「東北地方発見の重弁蓮華文鑑瓦に就いての一考察」(下)の中で本遺跡の関和神社下地点出土の瓦を用い、白河軍団関和久遺跡説を提出している。但し、この段階では本遺跡と関和久遺跡の区別はしていなかったものと考えられる。また、岩越氏の前出報文では借宿廃寺跡を寺院跡としているが、その最後の部分では白河風土記以来の借宿を軍団とする立場を取り、対岸の関和久を寺院跡としている。関和久遺跡の部分で正倉、あるいは寺院か私人の米倉跡としており、それ以上のことは述べていないが、本遺跡と関和久遺跡を一つのものと考えていたものと考えられる。その後、昭和35年の「借宿廃寺址その他について」で岩越氏も関和久の地を白河軍団跡としている。

さらに、昭和37年の「福島県遺跡地名表-1962-」では岩越氏は本遺跡を関和神社下遺跡、関和神社遺跡、高福寺遺跡、中ノ寺高福寺跡、関和久遺跡を明地遺跡と地点別に分けて報告している。

昭和44年に関和神社のある丘陵北側の水田地帯の圃場整備事業が行われた際、丘陵の北斜面より瓦窯跡が発見されており、これが関和久窯跡である。これと相前後して今年度調査地点附近の遺跡の所在も確認されている。そして昭和47年の「福島県遺跡地名表1971」には「福島県遺跡地名表1962」の地点に関和神社裏遺跡(関和久窯跡)、上町遺跡(今年度調査地点)が加えられた。

また、昭和45年に本遺跡を踏査した渡辺一雄は高福寺跡から今年度調査地点に至る各地点は一連のものとして把握すべきものであることを「福島県の寺院跡・城館跡」で述べている。

昭和47年には関和久遺跡の調査が開始され「関和久遺跡Ⅰ」では本遺跡、関和久遺跡、関和久窯跡は分けられるもので、関和久遺跡については軍団説を保留しながらも、郡家跡の可能性を述べており、「関和久遺跡Ⅱ」では郡家跡であろうとしている。さらに、昭和54年の「関和久遺跡Ⅶ」では調査者の1人、伊東信雄は白河郡家跡である関和久遺跡との関連から神亀5年設置の白河軍団跡が本遺跡である可能性を述べている。



第2図 遺跡全体図

このようにして現在に至っているが、関和久遺跡と分離されたのは関和久遺跡調査開始以来であり、「関和久遺跡Ⅱ～Ⅹ」では便宜上、上町地区、上町遺跡の名称を用いているが、これは遺跡地名表では今年度調査地点のみの名称であるので混乱をきたす可能性がある。また、近年の地番変更で本遺跡の大部分が泉崎村大字関和久字上町に入ってしまった。これらの点を考慮して、上町遺跡、中ノ寺高福寺跡、関和神社遺跡、関和神社下遺跡を一括して「関和久上町遺跡」と呼ぶこととしたい。さらに各地点を示す場合、上町地点などと便宜的に使用することとする。

第2節 調査日誌

10月12日～15日 調査開始、土壘跡一部切払いの後実測開始。関和久遺跡B M 1より原点移動(N 643.5m、E 690.5m)。土壘に第1、2トレンチ設定、表土剝離、精査。気候暖く作業順調。

10月18日～22日 土壘現況実測完了。第1・2トレンチ精査、第3トレンチ設定、表土剝離、S I 01検出。20日雨のため野外作業中止、土器洗い、既出土瓦の拓本取りを行なう。

10月25日～29日 第1・2トレンチ土壘・溝精査。第3トレンチ表土剝離完了、北半部よりS I 02～04検出、南半部は攪乱ピット・溝のみ。第1・2トレンチ間の土壘上に第4トレンチ設定、土壘上より明治41年のピット検出、各種遺物出土。今週は天気がよく作業は順調に進む。

11月1日～5日 第1・2トレンチ写真撮影、遣り方設定。第3トレンチS I 01・02掘り込み、精査。第5トレンチ設定、S B 01、S I 05・S X 01検出。11月3日祝日で休み。11月5日県庁記者クラブ一行、文化センター遺跡調査課、栃木県文化振興事業団一行来訪。

11月8日～12日 第1トレンチ遺構実測、S F 01断ち割り。第3トレンチS I 01～03実測、S I 04精査。第6トレンチS I 05・S X 01掘り込み・精査。10・11日雨。11日午後、岡田委員着、小雨の中作業。12日、伊東・梅宮委員も加わり指導を受ける。協議の上S F、S D、S B 01は中世～近世のもの確認すゆ。第6トレンチ設定。

11月15日～20日 第3トレンチS I 01～04精査、写真撮影、S I 04実測。第5トレンチS I 05、S X 01精査、写真撮影、遣り方設定、実測開始。第6トレンチ精査、S D 02・03精査、S E 01検出。17日午後文化庁桑原調査官来訪、18日指導を受ける。20日午後、伊東・梅宮委員、文化課長、日高、泉崎村助役、教育長、県南教育事務所社教主事が加わり現地説明会。

11月24日～26日 S F 01セクション実測、S B 01、S I 05・06・07、S D 02・03、S E 01実測、写真撮影。一部埋め戻し。

11月30日～12月1日 第4トレンチS F、S D 01実測。器材整理の上1日搬出。30日午後、坪井委員来訪、1日指導を受ける。午後、現場を撤収し調査を完了する。

第3節 既出土の瓦

上町遺跡からこれまでに出土している瓦は借宿廃寺、関和久遺跡出土の瓦と共に、主として岩越二郎氏、藤田定市氏、穂積国夫氏らによって収集保管されており、今日これらの遺跡群から出土する瓦群の大要を知ることができる。また内藤政恒氏、伊東信雄氏、進藤秋輝氏らによって、これらの瓦群の持つ内容もほぼ明らかにされてきている。

本節ではこれら先学の研究成果を踏まえた上で、共通する瓦を出土している。借宿廃寺、関和久遺跡、上町遺跡からこれまでに出土している軒丸瓦、軒平瓦を再度集成すると共にこれらの遺跡群出土瓦群に共通する型式番号をもって瓦を示すこととしたい。なお、型式番号の各々は同一の范によって作られたものに対応するものである。また福島県内の遺跡ではすでに腰浜廃寺出土の瓦群に型式番号が付されており（福島市教委、1980. 3）、これとの重複を避けるために本遺跡群では、1000番台の番号を使用し、1000～1499の間に軒丸瓦、1500～2000の間に軒平瓦を充てることにする。また丸瓦、平瓦については、従来関和久遺跡の報告書を通して分類が行なわれてきているが、特に平瓦は発掘した年度ごとに各々分類が行なわれており、同一群の平瓦の分類名称が報告書ごとに変化するなど、やや混乱を生じているように思われるので、これについても従来出土している瓦全体の分類を行ない、統一した名称を付すこととした。

1. 軒丸瓦

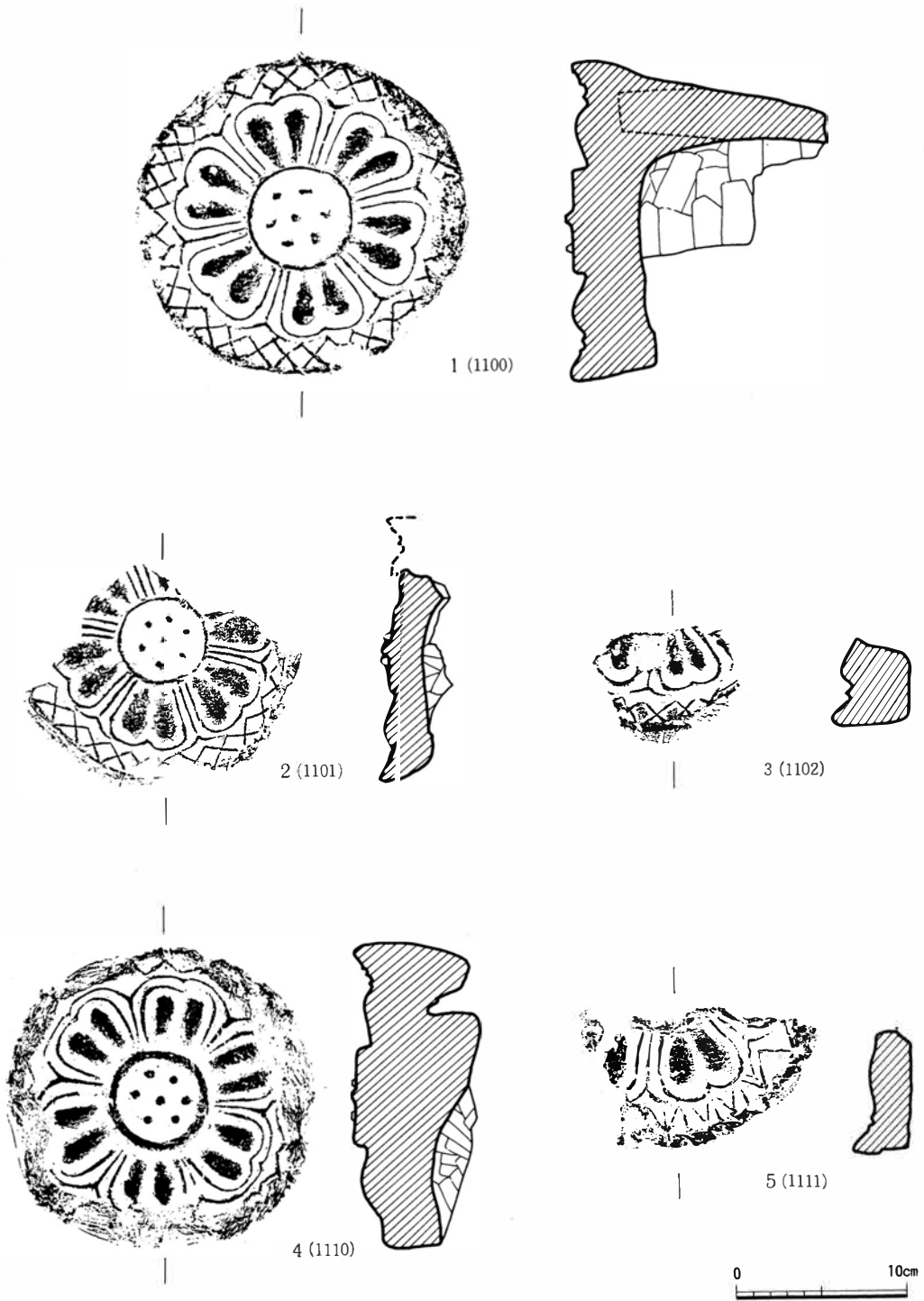
1100軒丸瓦（第3図1） （複弁六葉蓮華文第一類）

複弁六葉蓮華文である。面径18.5cmを計る。中房は直径6.0cmと比較的大きく、約0.8cm突出している。蓮子は1+6で周囲の6個の蓮子は各々間弁に対応した位置に配されている。花卉は反りかえりが強い。各花卉の間にY字状の間弁を配している。外区は内側に向けて傾斜し、X字状の浮文が付されている。

丸瓦との接合は、まず瓦当裏面に丸瓦広端部に対応する弧状の溝をうがち、次に接合を強固にするために、あらかじめ縦方向に傷をつけた丸瓦の広端を溝に差し込み、上下に粘土を加える方法をとっている。この方法は本遺跡群出土の複弁六葉蓮華文軒丸瓦全体に共通するものである。瓦当裏面及び接合部に近い丸瓦部凹面はナデ、瓦当周縁及び接合部に近い丸瓦部凸面は縦方向のケズリで調整されている。

1101軒丸瓦（第3図2） （複弁六葉蓮華文第二類）

複弁六葉蓮華文である。1100軒丸瓦と同様の文様構成を持つが、面径は15.5cmを計り、やや小ぶりである。中房直径は5.0cmで、1+6の突出した蓮子を持つ。周囲の6個の蓮子の各々が花卉の中心に対応する位置に配される点は1100軒丸瓦と異なっている。丸瓦との接合方法は、1100軒丸瓦とまったく同じである。



第3図 軒九瓦

1、5 岩越二郎氏集収品

2、3 穂積国夫氏蔵

4 金子誠三氏蔵

1102軒丸瓦（第3図3）

複弁蓮華文である。小破片であるため全体の文様構成を知ることはできない。弁幅が他の複弁蓮華文に比して小さいことが特徴である。面径も比較的小さいように思われる。花卉は反りかえりが強い。外区は内側に傾斜しており、×字状の浮文が付される。

1110軒丸瓦（第3図4）（複弁六葉蓮華文第三類）

複弁六葉蓮華文である。文様構成は1100軒丸瓦とほぼ同じであるが、間弁の突端がのびて花卉の先端部分をつつみ、他の間弁と連続していく点に大きな違いがある。蓮子も1100番台のものに比して低く、中心の蓮子が周囲の蓮子に比してやや大きい特徴がある。花卉の反りかえりはほとんどなく、平面的な文様になっている。外区は内側に傾斜しており、×字状の浮文が付される。丸瓦との接合方法は1100軒丸瓦と同様であるが、接合後瓦当裏面に強いケズリを加えくぼませている。

1111軒丸瓦（第3図5）

複弁蓮華文である。小破片であるために全体の文様構成は不明である。弁区は比較的大きな花卉とV字形及び直線とに分かれた間弁とで構成される。花卉にはほとんど反りかえりがなく、平面的な文様になっている。外区は内側に傾斜しており、外区から内区外周にかけて逆V字形及び棒状の浮文が交互に配列される。瓦当裏面はケズリで調整されている。

1120軒丸瓦（第4図6）（重弁八葉蓮華文2A類）

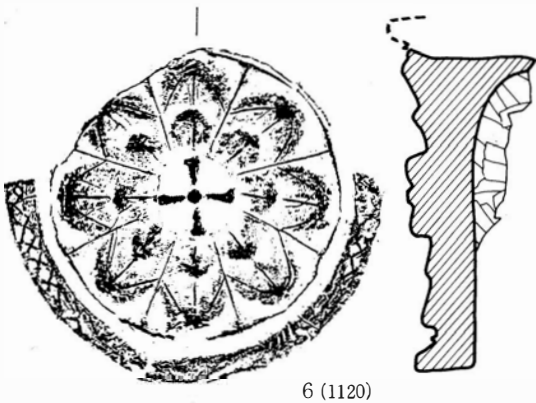
単弁八葉蓮華文である。（注1）中房は約0.9cm突出し、円形の蓮子を中央に1個、その周囲の花弁の中央に対応する位置に楔形の蓮子4個を配置している。弁区は外方にいくにつれてに上方に反る大型の花弁とそれに重なる子葉及び間弁とで構成される。花卉の先端から中心及び間弁の中程の部分に向かってのびる細い隆線が3本描かれている。外区は外側の平端な部分と内側に傾斜する面とに分かれ、傾斜する面には×字状浮文が付されている。丸瓦との接合は、1110軒丸瓦と同様であるが、丸瓦広端部には縦方向の傷は付けられていない。瓦当裏面にはケズリが加えられている。

1121軒丸瓦（第4図7）（重弁八葉蓮華文2B類）

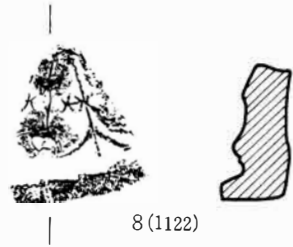
単弁八葉蓮華文である。面径は1120軒丸瓦よりもやや大きく、弁区の文様は同じである。中房の突出は約0.4cmで低く、圏線をめぐられている。中に1+4の円形の蓮子を配している。4個の蓮子はほぼ間弁に対応する位置である。外区の形状は1120軒丸瓦と同様であるがヘラケズリによって調整されており素文である。

1122軒丸瓦（第4図8）

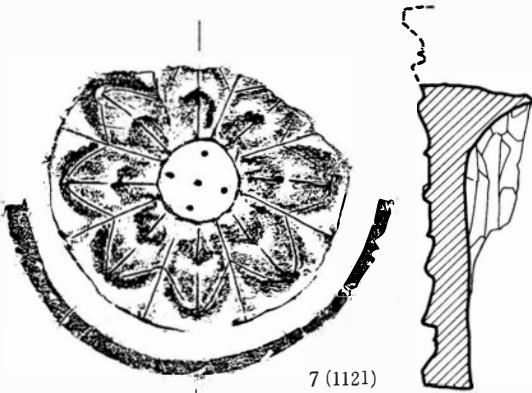
単弁蓮華文である。小破片であるため文様構成は不明である。花卉は1120・1121軒丸瓦とほぼ同じであるがややふくらみに欠ける。花卉の先端から中心に向かって一条の細い隆線がのび



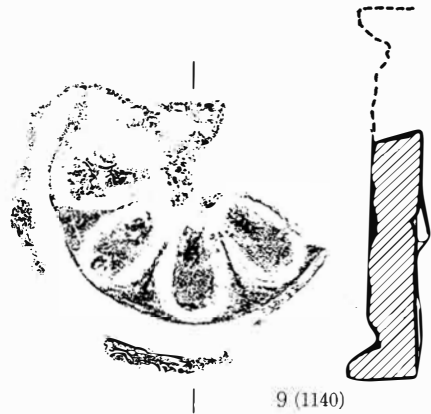
6 (1120)



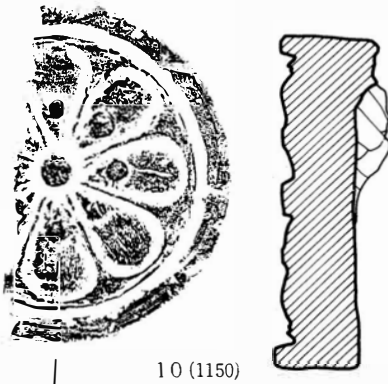
8 (1122)



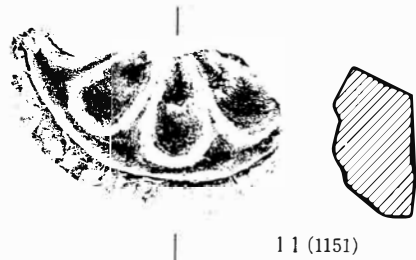
7 (1121)



9 (1140)



10 (1150)



11 (1151)



第4図 軒丸瓦 6~10 穂積国夫氏蔵 11 岩越二郎氏集取品

る。間弁は隆線で表現しており、Y字形を呈さない。花卉の中程の左右及び間弁の中程の部分に「米」形の浮文が付される。外区は1122軒丸瓦と同様である。瓦当裏面はナデで調整されている。

1140軒丸瓦（第4図9） （重弁八葉蓮華文軒丸瓦第一類）

単弁八葉蓮華文である。1＋4の蓮子を持つ中房の周囲に八葉の花弁を配する。4個の蓮子は各々間弁に対応する位置に置かれている。花卉の根本にはやや不明瞭ではあるが子葉が重ねられている。外縁はナデで調整されており素文である。瓦当裏面はナデ及びケズリで調整されている。

1150軒丸瓦（第4図10） （重弁八葉蓮華文軒丸瓦第三類）

単弁八葉蓮華文である。蓮子を持たない小さな中房の周囲に花卉を配している。花卉の根元には子葉が重ねられている。子葉の先端はつぶされている。丸瓦との接合は瓦当裏面の外周に合わせて丸瓦の広端部を押し付け、下にわずかに粘土をはり足して行なっている。瓦当裏面はナデによって調整している。

1151軒丸瓦（第4図11）

単弁蓮華文である。小破片のため文様構成は不明であるが、1150軒丸瓦と類似したものであるらしい。花卉の根本にはふくらみのある子房が重ねられている。

1160軒丸瓦（第5図12） （重圏文軒丸瓦）

中心の円圏と外縁との間に四重の同心円文を描いたものである。各円文は各々内側に傾斜する面を持っており、立体的な同心円文になっている。外縁は細く、ナデによって調整されている。丸瓦部は外面にナワタタキを残すもので、丸瓦の広端部と瓦当裏面の外周部分とを合わせて下に粘土を付加して接合されている。

1180軒丸瓦（第5図13） （細弁蓮華文軒丸瓦）

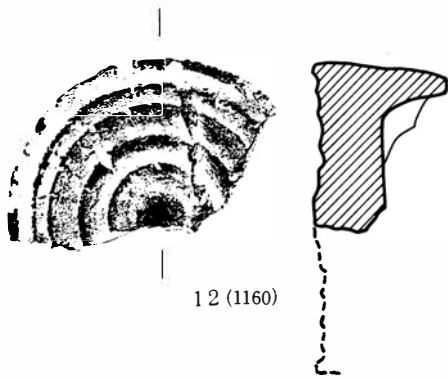
細弁蓮華文である。中房は突出せず、二重の圏線によって区画され、中心に1個の大きな蓮子、その周囲に8個の小さな蓮子を配置する。中房の周囲には16枚の花弁を配し、花卉の間には間弁の表現かと思われるV字形の浮文が付される。外区内縁には交差する鋸歯文が配されている。外区外縁はケズリで調整されている。

丸瓦との接合は、瓦当裏面に丸瓦の広端部を当て、上下に粘土をはり足すことによって行なわれている。瓦当裏面は丸瓦との接合後えぐるようなヘラケズリによってくぼんでいる。

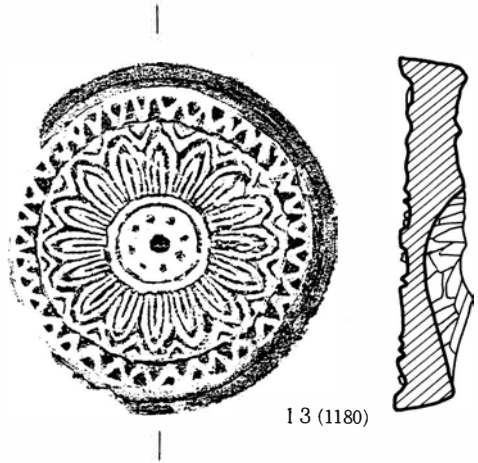
2. 軒平瓦

1500軒平瓦（第5図1・2 第6図3・4）（重弧文軒平第一類）

ロクロ引き重弧文である。瓦当面の厚さは3～4.5cm、顎の深さは7.5～10.5cm程度で、段顎になっている。弧文の沈線の幅には若干のバラエティが見られる。顎部は無文でナデによって



12 (1160)

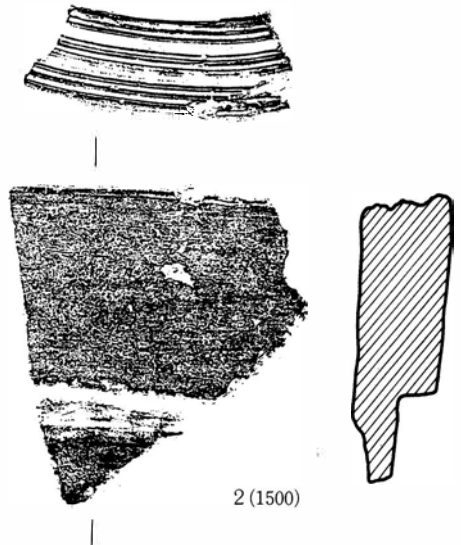


13 (1180)

軒丸瓦 12岩越二郎氏集収品 13 穂積国夫氏蔵



1 (1500)



2 (1500)



第5図 軒丸瓦・軒平瓦 1、2 岩越二郎氏集収品

調整されているのが普通であるが、まれにヘラ描き沈線によって斜格子が付されているものがある。

1520軒平瓦（第6図5）（重弧文軒平瓦第二類）

ヘラ描き重弧文である。瓦当面の厚さは4cm前後、顎の深さは7cm前後である。顎は瓦当面から平瓦部にかけて徐々にうすくなっていく傾斜顎になっている。平瓦部との境界に横走る2本の沈線を描き、その上部に山形文、鋸歯文、山形文と同心円文を組み合わせたもの、格子文などを描く。顎部接合の際に平瓦広端部に格子形に傷を付けるのが普通である。

1540軒平瓦（第6図6）（珠文縁鋸歯文軒平瓦）

瓦当面の中央部分に2列の連続する鋸歯文を置き、その周囲に珠文を配するものである。外周は無文である。顎の形態は1520軒平瓦と同様であるが無文でケズリが加えられており、端部は面取りされている。平瓦は凸面にナワタタキ、凹面に布目を残すものである。

1560軒平瓦（第6図7）（無文軒平瓦）

ナワタタキを残す平瓦にわずかに粘土をはり足して軒平瓦としたものである。瓦当面の厚さ2.5cmを計る。瓦当面及び顎部にナワタタキを残している。顎の深さ5.5cm、傾斜顎である。

3. 丸瓦の分類

今年度の出土資料も含めて関和久・借宿廃寺・上町の各遺跡から出土している丸瓦の中には、有段、無段の両者が存在することはすでに知られているが、全形の窺い得る資料はごくわずかであるため、丸瓦全体の分類基準とすることは現状では困難であるように思われる。従ってここでは凸面のタタキ、調整を基準として分類したい。

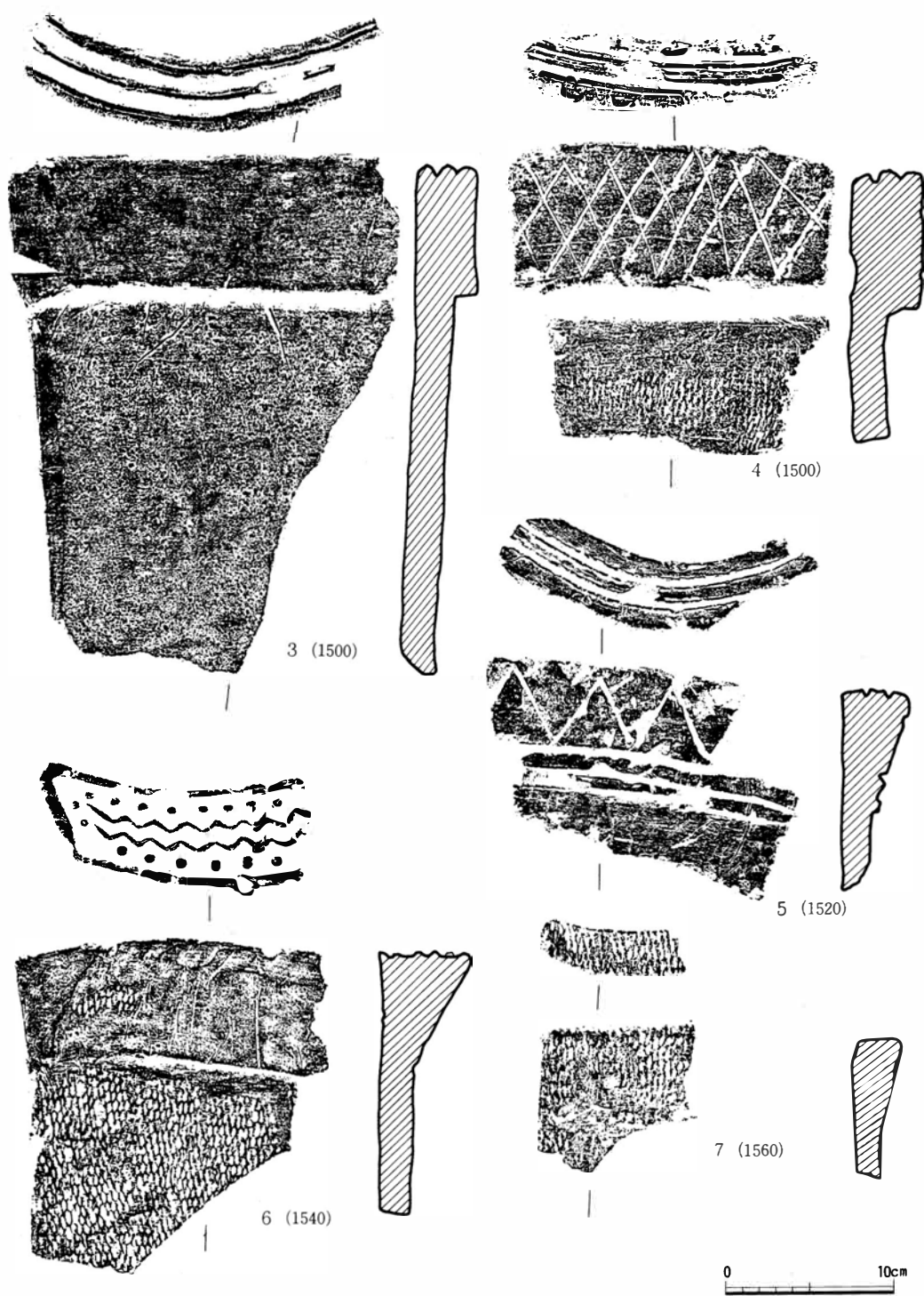
第1類（第26図1）

凸面のタタキの痕跡をナデによってすり消すものである。有段、無段の両者がある。凸面の調整は多くの場合、最後に回転を利用して横方向のナデ、次に縦方向のナデが施される。凹面には布目が残されるが、両端部から2～3cmの範囲は縦方向のケズリによって布目をすり消しているのが普通である。布の綴じ合わせの痕跡、糸切り痕跡、粘土の合わせ目が観察され、粘土板桶巻き2枚造りであることが知られる。

第2類（第7図1）

凸面のタタキの痕跡を縦方向のケズリによってすり消すものである。借宿廃寺より完形品1点出土している。第7図1は全長39.5cm広端部幅20.5cm、狭端部幅11.5cmを計る。無段である。凹面には布目が残されるが両端部から1～2cmの範囲には縦方向のケズリが加えられる。布の綴じ合わせの痕跡、粘土紐の巻き上げ痕跡が観察され、粘土紐巻き2枚造りであることが知られる。これまでのところ、関和久、上町の両遺跡からの出土例は知られていない。

第3類（第7図2）



第6図 軒平瓦 3~5 岩越二郎氏集収品 6 穂積国夫氏蔵
7 関和久県道発掘出土資料

凸面にナワタタキの痕跡をそのまま残すものである。全長は不明であるが、31.5cm残存しており、広端部幅17cmを計る。凹面には布目が残され、ほとんど調整されない。粘土板桶巻き2枚造りである。

4. 平瓦の分類

凸面に残される調整、タタキ等によって分類し、各々の細かな特徴によって細分した。ただし4類と5類とは後述するように製作技法が異なる可能性が強く、その他の特徴にも若干の違いが認められるため敢えて別の分類とした。

第1類 (第8図1)

凸面のタタキをナデ、又はケズリによってすり消しているものである。凹面には布目が残されるが、部分的にナデ、ケズリですり消されることが多い。模骨痕、布の綴じ合わせ目、糸切り痕跡が観察される。粘土板桶巻き造りである。凸面のナデの特徴によって1-a類回転を利用した横方向のナデを施すもの、1-b類縦方向のケズリを施すもの、1-c類不定方向のナデを施すものに細分される。

第2類 (第8図2)

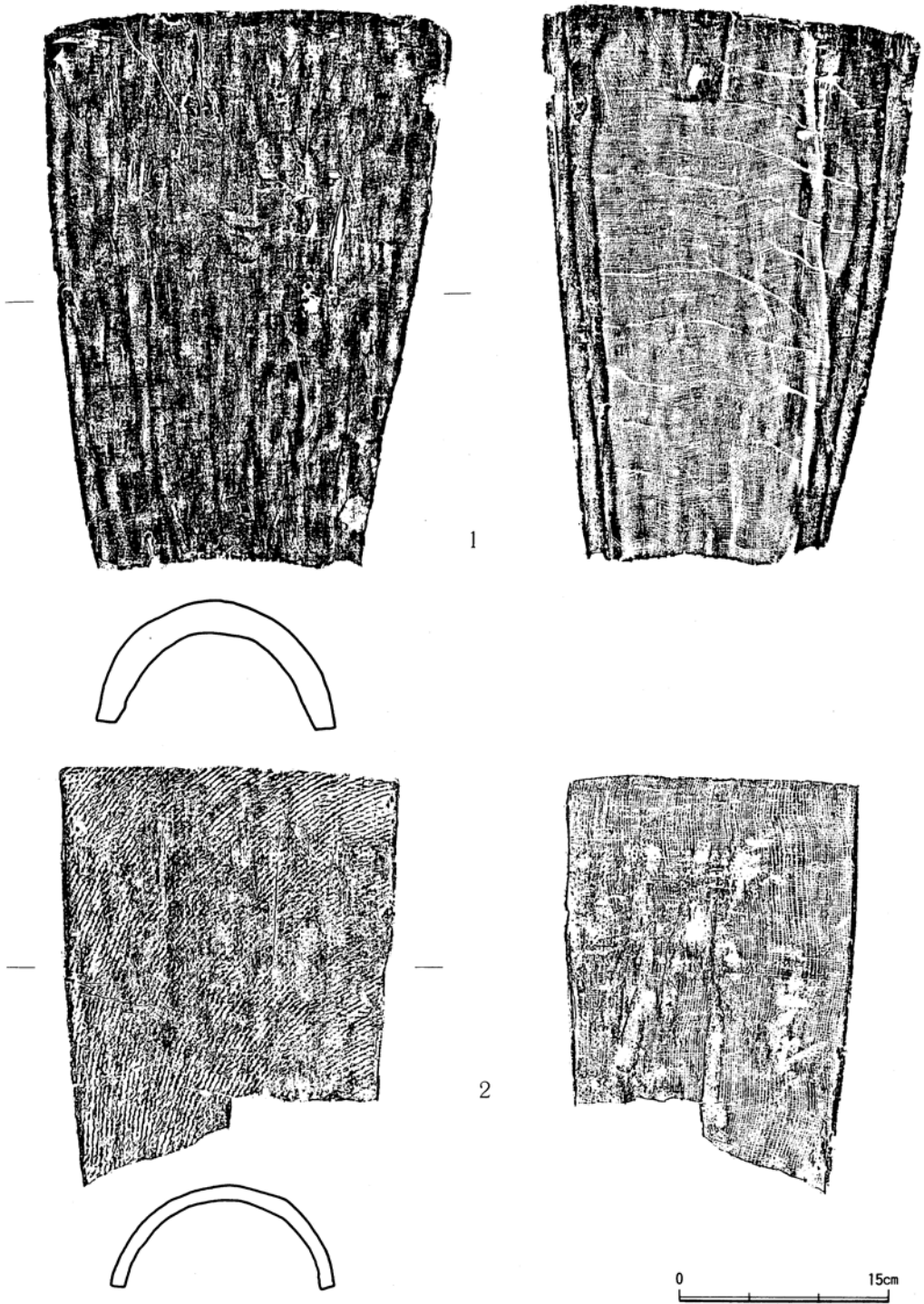
凸面に布目、模骨痕が観察されるものである。第8図3は残存長36.5cm、広端部幅30.5cmを計り、広端部幅と狭端部幅との差が小さいようである。凸面には模骨痕を消すことを意図したかのような部分的な縦方向のケズリが加えられることが多く、まれにほぼ全面にケズリを施すことがある。布目の残されている部分には、かつて川原寺の凸面布目瓦で観察されたものと同様のくぼみ(奈良国立文化財研究所、1960. 3)が観察されることがある。まれに粘土板の合わせ目が観察されることがある。凹面には原則として回転を利用したと思われる横方向のナデが加えられるが、その後縦方向のナデないしケズリがなされることも多い。左右両側面はケズリによって3面に面取りされている。

第3類 (第8図3・4・5、第26図4)

凸面に格子ないし×形のタタキを残すものである。凸面はタタキの後に調整されることは少ないが、まれにナデないしケズリが加えられることもある。凹面には布目が残され、模骨痕、糸切り痕跡が観察される。調整されることはまれである。粘土板桶巻き造りである。格子ないし×形の種類によって、3-a類比較的小型の斜格子タタキを残すもの(第8図3)、3-b類比較的大型の斜格子タタキをまばらに施すもの(第26図4)、3-c類大型の×形を残すもの(第8図4)、3-d類×形の連続したタタキを残すもの(第8図5)に細分される。なお3-a類のタタキと3-d類のタタキが同じ瓦に施される場合がある。

第4類

凸面に比較的低密度の低いナワタタキ、凹面に明確な模骨痕を残すものである。凸、凹両面共



第7図 丸瓦 1 岩越二郎氏収集品 2 今年度調査出土

に調整されることは少ない。粘土板桶巻き造りである。この類はこれまでのところ借宿廃寺からの出土例が知られているだけである。

第5類 (第8図6)

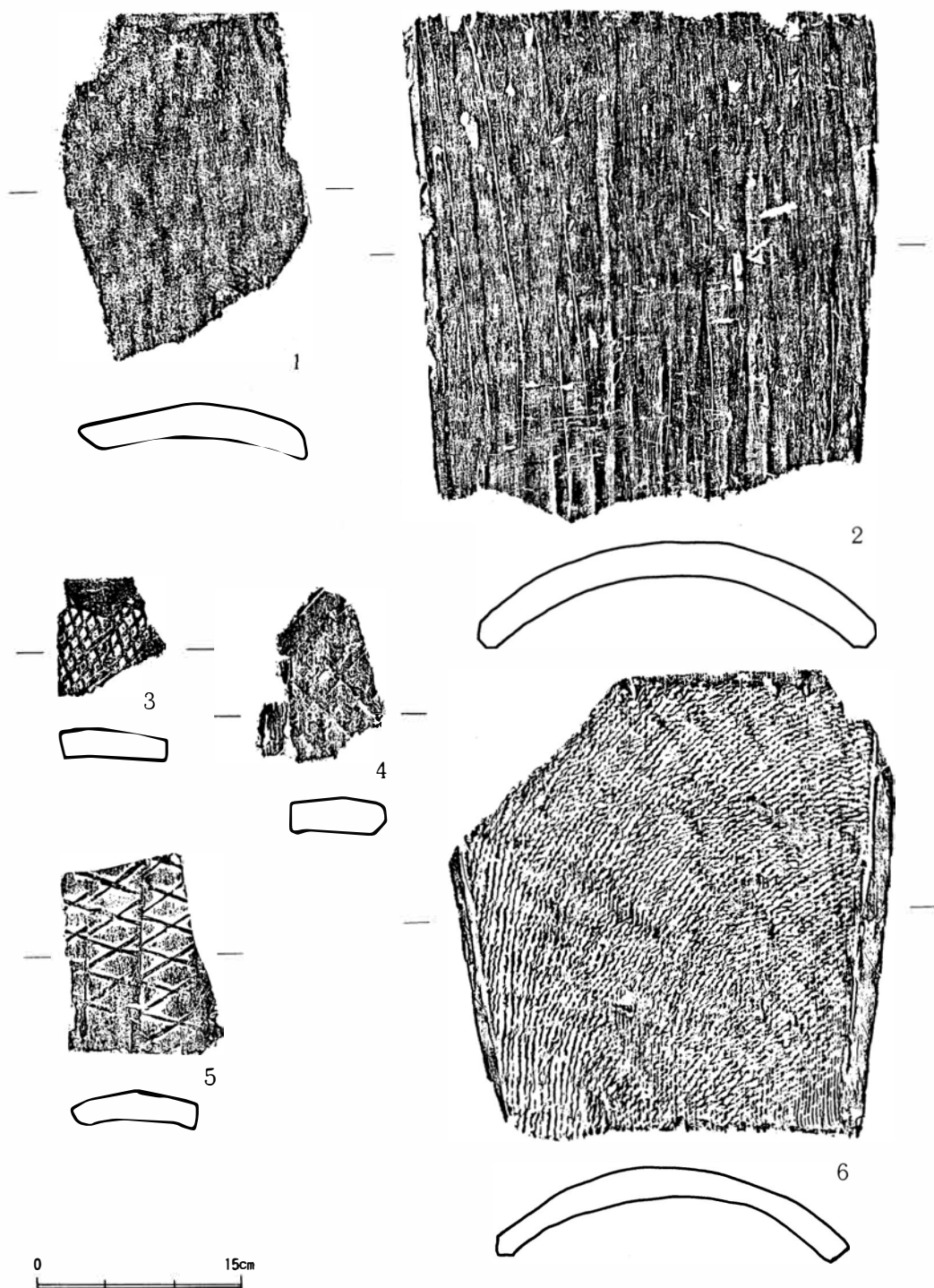
凸面に密なナワタタキを残し、凹面に模骨痕の観察されないものである。第8図6は全長33.2cm、狭端部約21cmを計る。凸面はタタキの他に部分的なナデが見られることがある。凹面は布目を残すが、四周の幅約1cmをケズリですり消すことがこの類の大きな特徴である。粘土の合わせ目、布の綴じ合わせ痕跡等も観察されず、かつて進藤秋輝氏が指摘したように(福島県教委、1974. 3. 18P)、1枚造りの可能性が強いものである。

注1 従来重弁八葉蓮華文とされてきたものである。「重弁」の名称は内藤政恒氏以来多賀城の瓦の系譜に連なる瓦という意味合いを含めて使われてきているように思われる。ここで述べる1120・1121軒丸瓦の花弁は多賀城跡出土の重弁蓮華文とはほぼ同じ形態であるが複弁蓮華文軒丸瓦の要素と見られる外縁の×字状浮文、花弁の先端から中心部及び間弁の中程の部分に向かってのびる細い隆線など、多賀城跡出土の重弁蓮華文には見られない要素も合わせ持っているため、ここではより広い意味を持つ「単弁」の語を使用することとした。

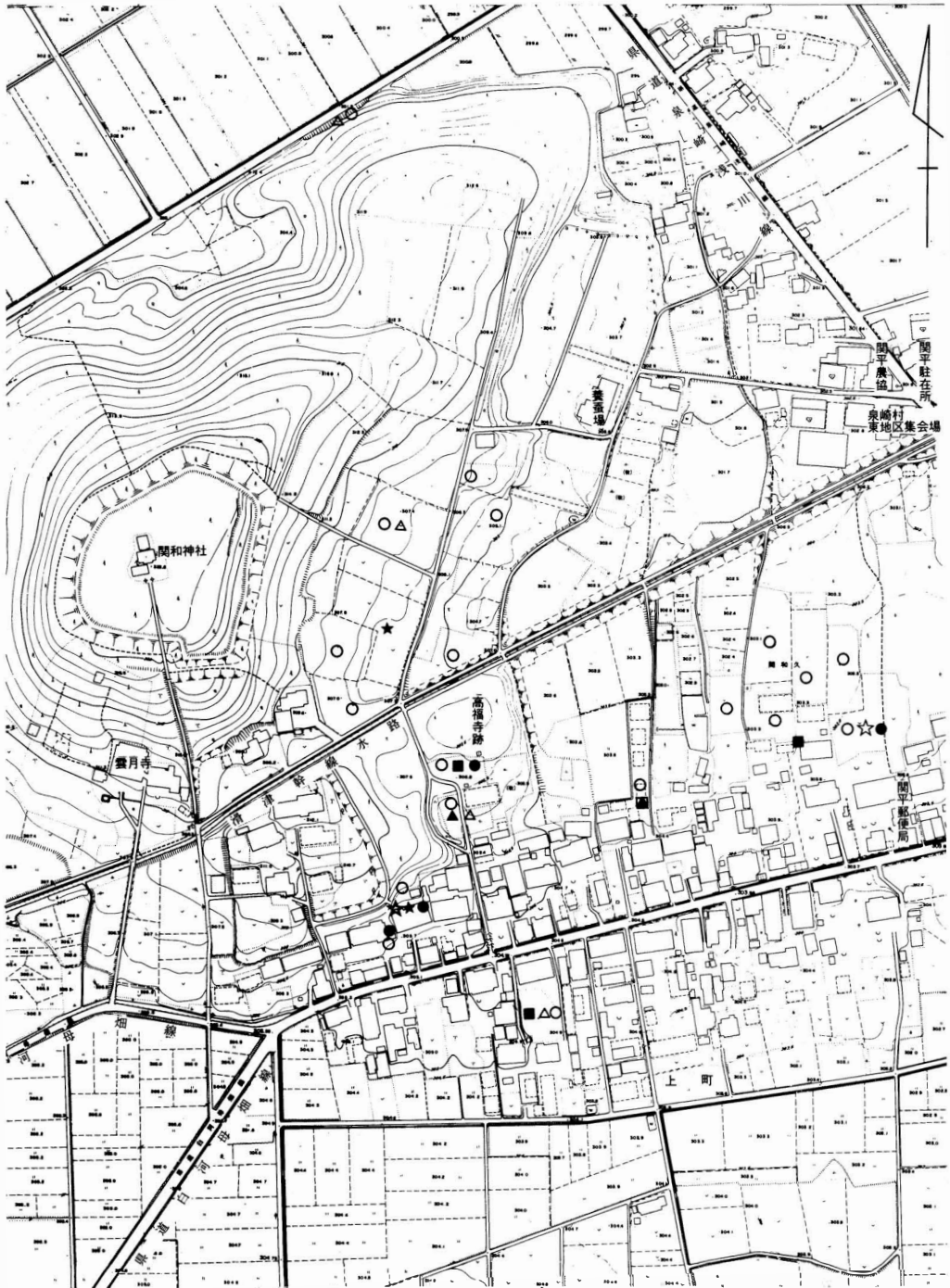
引用・参考文献

- 内藤政恒 1937. 8 東北地方発見の重弁蓮華紋鏡瓦に就いての一考察(上) 宝雲第20冊
1938. 6 東北地方発見の重弁蓮華文鏡瓦に就いての一考察(下) 宝雲第22冊
国立奈良文化財研究所 1960. 3 川原寺発掘調査報告
福島県教委 1973. 3～1982. 3 関和久Ⅰ～関和久Ⅹ
泉崎村教委 1974. 12 関和久遺跡一県道拡幅工事に伴う調査一
福島市教委 1980. 3 腰浜廃寺Ⅱ 福島市埋蔵文化財報告書第7集

なお今回の集成に際し、穂積国夫氏、金子誠三氏、白河市歴史民俗資料館より資料提供を受けた。記して感謝の意を表したい。



第8図 平瓦 1・3～6 今年度発掘調査出土 2 岩越二郎氏収集品



第9図 瓦分布図

- 1100~1102・1110・1111 ■ 1120~1122 ◻ 1150 △ 1180 ▲ 1160
- ★ 1500 ☆ 1520 ○ その他

第 2 表

型式番号	瓦 当 面											丸 瓦 部				玉 縁 長	全 長	
	直 径 cm	内 区					外 区						形 態	製 作 技 法	凸 面 調 整			凹 面 調 整
		内 区 径 cm	中 房		弁 区		外 区 広 cm	内 縁		外 縁								
			径 cm	蓮 子	弁 数	弁 幅 cm		幅 cm	文 様	幅 cm	文 様							
1100複弁六葉蓮華文第1類	18.5	15.3	6.0	1+6	複 6	5.7	1.6			1.6	X字状浮文	不明	粘土板巻2枚造り	ナ デ	布目両端部ケズリ	不明	不明	
1101複弁六葉蓮華文第2類	15.5	13.1	6.0	1+6	複 6	4.7	1.2			1.2	X字状浮文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1102	不明	不明	不明	不 明	複(弁数不明)	3.7	1.2			1.2	X字状浮文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1110	17.0	13.6	5.8	1+6	複 6	4.2	1.7			1.7	X字状浮文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1111	不明	不明	不明	不 明	複(弁数不明)	4.9	1.8			1.8	逆V字及び棒状浮文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1120重弁八葉蓮華文2A類	18.5	15.5	4.2	1+4(楔形)	単 8	3.8	1.5			1.5	X字状浮文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1121重弁八葉蓮華文2B類	19.4	15.4	4.3	1+4	単 8	4.0	2.0			2.0	無 文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1122	不明	不明	不明	不 明	単(弁数不明)	不明	1.5			1.5	無 文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1140重弁八葉蓮華文軒丸瓦第一類	19.0	14.8	4.0	1+4	単 8	3.5	2.1			2.1	無 文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1150重弁八葉蓮華文軒丸瓦第三類	17.6	15.2	2.2	なし	単 8	3.3	1.2			1.2	無 文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1151	不明	不明	不明	不 明	単(弁数不明)	3.3	不明			不明	不 明	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	
1160重圏文軒丸瓦	16.0	14.6	4.1	なし	同心円文		0.6				無 文	不明	粘土板巻2枚造り	ナワタタキ	不 明	不明	不明	
1180細弁蓮華文軒丸瓦	18.5	6.3	4.1	1+8	単 16	2.0	2.7	1.2	鋸歯文	1.5	無 文	不明	不 明	不 明	不 明	不明	不明	

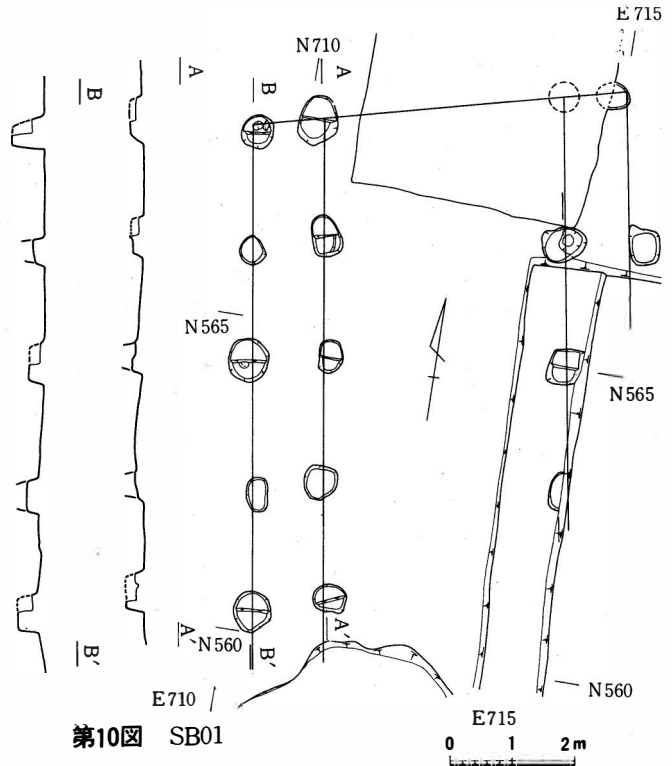
第3章 遺構と遺物

第1節 建物跡

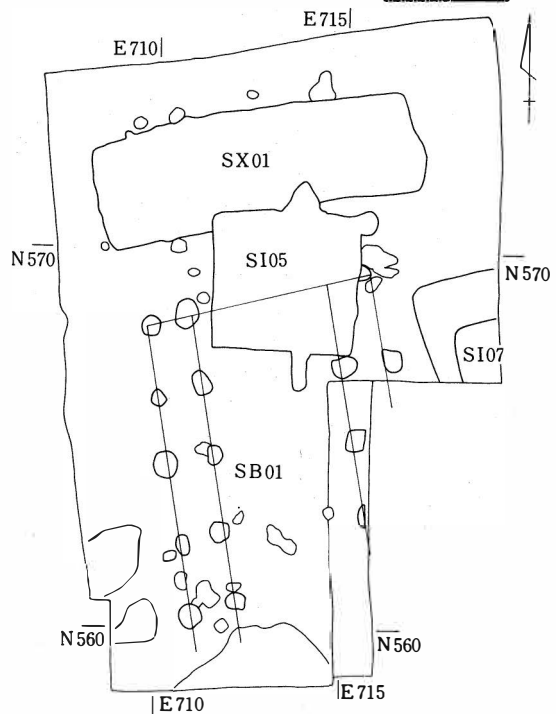
SB01 (第10・11図 第10図版)

第5トレンチ南半部より検出された掘建柱建物で、掘り込み面はL-II上面である。南北棟で東西両面に廂を有する。ややゆがんだ建物である。柱穴は直径20~35cmの小形のものであり、身舎の側柱は西側は芯~芯で北より1.8m+2.0m+2.0m+1.8m、東側は北より(2.3m)+2.0m+2.0mとなる。南北は5間又はそれ以上と考えられるが、南側は後世の攪乱が大きく入っており、その南は調査区外のために不明である。

東西は2間と考えられ、東側と西側に60cm~70cmの廂が付いている。方位は西の側柱の芯~芯でN-10°-Wを取っている。



第10図 SB01



第11図
第5トレンチ遺構配置図

第2節 堅穴住居跡

S I 01 (第13図 第6・7図版)

〔検出状況〕 第3トレンチ北西コーナー付近より検出された堅穴住居跡で、東壁南半部でS I 04と切合っているが、重複部分が極めて少なく前後関係は不明である。また、北壁の大部分と付近の覆土は新しい溝により切られ、壁沿ではこの攪乱が床面近くまで達している。

〔プラン〕 東西3.6m、南北3.5mのややゆがんだ方形プランを有する。北東コーナーと北西コーナーが角を切り取ったような形態を呈しているのは壁の一部が溝による攪乱を受けたためと考えられる。方位は北壁の方向からN-3°-Wを取っている。

〔覆土〕 北半部は大部分が攪乱により切られているが、南半部は最大35cmの深さで残っている。ℓ-1.2は黄褐色～暗黄褐色土、ℓ-3～5な暗褐色～黒褐色土で全体にローム粒を含んでいる。b区ℓ-4cからは灰釉陶器の浄瓶の頸部が出土している。

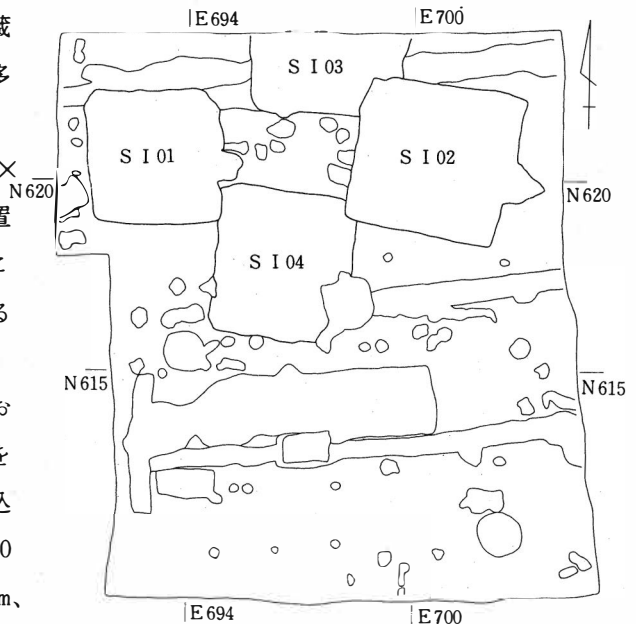
〔壁・床〕 壁は西壁と南壁の残りが良く、南壁で深さ20～25cm、床面から115°、西壁で深さ30～35cm、床から123°の立ち上りを有する。北壁は攪乱のためほとんど残っていない。床はややよごれたローム面で硬くたたき占められており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕 西壁から北壁沿にかけて作られており、幅は18～32cm、床面からの深さは2～10cmを測る。覆土は全部分に6層が見られた。

〔ピット〕 床面から大小8個のピットが検出されている。P₁はカマド右側の東南コーナー部にあり、位置、大きさ、覆土等から貯蔵穴と考えられる。覆土からは土器類が多く出土している。

P₂は52×48cmの円形掘り形の中に35×33cmの柱痕らしきものが検出され、位置的に見ても柱穴の可能性がある。P₃～P₈についてはS I 01関連のものと考えられるが、性格は不明である。

〔カマド〕 東壁中央部に作られており、半分は壁に掘り込まれており、壁を中心に半部は外側、半部は内側に掘り込まれたピットのような形をし、外側は10～15cm幅で焼けている。大きさは幅60cm、奥行75cm、底面で幅48cm、奥行55cm、壁



第12図
第3トレンチ遺構配置図

上面からの深さ27cm、床面からの深さ10cmとなり、床面はローム面が強く焼け赤色化ししまっている。カマドの右袖に当る部分には芯材と考えられる河原石、左袖と考えられる部分には壁下部から床面にかけて白色粘土が若干残っており、この部分に袖があったのを住居が廃棄された時点、又はその後には破壊されたものと考えられる。

出土遺物 (第14図 第19図版)

遺構に伴う遺物 (1~7)

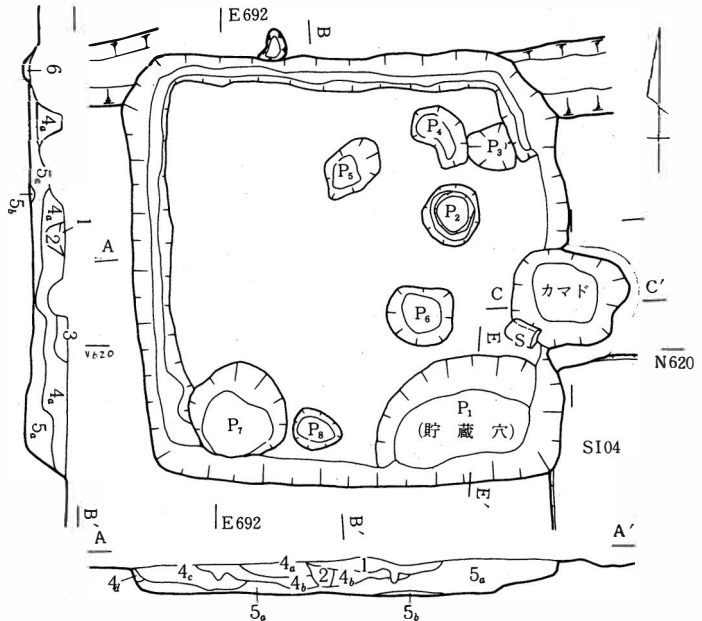
土師器 杯、カマド、
貯蔵穴、床面から出土しており、底部個体数で10個体を識別できた。そのうち実測できたものは4点で、他は小破片のため実測できなかった。これらは体部下半~底面に、回転ヘラ削り再調整が、加えられ、切り離し痕の不明なロクロ杯1類である。2には、不明の墨書がある。

甕、実測可能なものは貯蔵穴より2点出土しており、2点とも口縁~体部上半の破片である。6は、ロクロ調整のもので、頸部は短く「く」形に外反し、口唇部中央には浅い溝状の凹みがあり、上端はつまんだように立ち上る。

筒形土器 実測できたのは、貯蔵穴の一部には、指による押圧痕と思われるものがみられる。

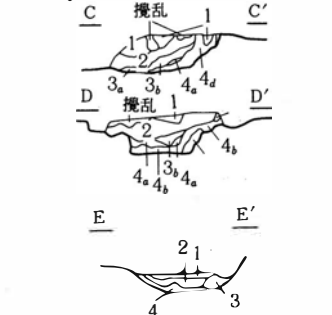
覆土出土の遺物 (8・9)

土幣器 杯、土師器で、実測できたのは、この1点の



住居跡覆土	
第1層 黄褐色土	焼土・白色粘土を含む。後世のビッド焼土。
第2層 暗黄褐色土	焼土・粘土粒を若干含む。後世のビッド焼土。
第3層 黒褐色土	軟質、粘性、しまりなし。若干の焼土・ローム粒を含む。
第4層 暗褐色土	粘性なく、ややしまりあり。多くのロームブロック・焼土粒を含む。
第4 _a 層 *	粘性、しまりなく、焼土粒を多く含む。
第4 _b 層 *	粘性、しまりあり。焼土・ローム粒等を含まなく均質。
第4 _c 層 *	地山ロームのブロックを多く含む。
第5層 暗黒褐色土	粘性なく、ややしまりあり。若干のロームブロック・焼土粒を含む。
第5 _a 層 *	5層よりローム粒・焼土粒を多く含む。
第6層 暗褐色土	粘性あり、しまり弱い。ローム粒を若干含む。

貯蔵穴覆土	
第1層 灰白色工	粘性、しまりあり。灰の粘土化したもので、焼土・木灰粒を含む。
第2層 暗黄褐色土	粘性、しまりなし。炭化物・焼土・ローム粒を若干含む。
第3層 黒褐色土	粘性ややあり、しまりなし。多くのロームブロック、若干の焼土粒を含む。
第4層 *	粘性、しまりなし。ロームブロック、炭化物・焼土粒を多く含む。

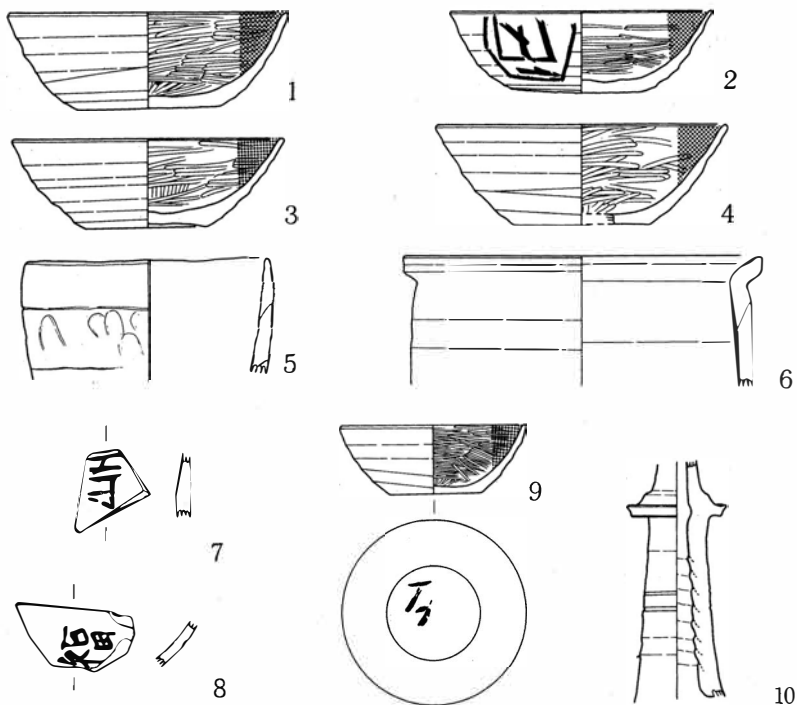


カマド覆土	
第1層 暗褐色土	粘性がややあり、しまりなし。ローム・粘土・焼土粒を若干含む。
第2層 *	粘性、しまりなし。ローム・粘土・焼土粒を若干含む。
第3層 黄褐色土	粘性、しまりややあり。ローム・ブロックよりなる。
第3層 暗黄褐色土	粘性ややあり、しまりなし。ローム粒を含む。
第4層 赤褐色工	粘性、しまりなし。焼土中に灰のブロックを含む。
第4 _a 層 暗赤褐色土	粘性、しまりあり。焼土と褐色土の層り土。
第5層 黄褐色土	粘性、しまりなし。均質でありカマド袖の崩れらしい。

第13図 SI01

小型のもので、体部下半～底面に、回転ヘラ削り再調整が加えられ、切難し痕の不明なロクロ杯1類である。底面には、墨書があるが、表面がやや荒れており判読は不可能である。

灰釉陶器 浄瓶、頸部から口縁部にかけての破片で、頸部中位に、7mm間隔で細い2本の沈線がめぐっている。



第14図 SI01出土遺物 1 カマド出土 2・3・5・6 貯蔵穴出土 4 床面值上層出土
7~10 覆土出土 1~4・7~9 土師器杯 5 筒形土器 6 土師器甕
100灰釉陶器 (縮尺 1/3)

第3表 S I 01出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 単位cm						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
14	1	17-3	土師器	杯	カマド		13.0			6.7	4.5			
〃	2	17-4	〃	〃	貯蔵穴		12.2			6.2	3.8			不明墨書
〃	3	17-3	〃	〃	〃		12.6			5.7	4.2			
〃	4		〃	〃		床直	13.6			6.4	4.7			
〃	5		〃	筒形	貯蔵穴		11.2							
〃	6		〃	甕	〃		16.8	15.6						
〃	7		〃	杯		ℓ-3								破片「寺」墨書
〃	8		〃	〃		ℓ-1								破片「福」墨書
〃	9	17-2	〃	〃		ℓ-2	8.6			4.4	3.2			不明墨書
〃	10	17-5	陶器											

外面は全体に、薄いオリブ色の釉がかかっており、縦方向に約 $\frac{1}{3}$ は、薄いオレンジ色で釉が薄くなっている。オレンジ色になっている反対側の上部の釉の溜った部分は、薄いコバルト色になっている。内面には粘土ヒモ痕が著しい。

瓦 すべて覆土出土で、熨斗瓦（第15図）、丸瓦1・3類、平瓦1 a、5類各1点、平瓦2類2点が出土している。

S I 02 （第16 第8・9図版）

〔検出状況〕 第3トレンチ東半部で検出された堅穴住居跡で北西コーナーがS I 03の南東コーナーを、南西コーナーがS I 04の北東コーナーをそれぞれ切っている。検出面はローム層上の漸移層上面である。

〔プラン〕 東壁中央にカマドがある方形プランを有し、東西・南北とも4.1mの正方形を呈する。南北軸はN-10°-Eをとっている。

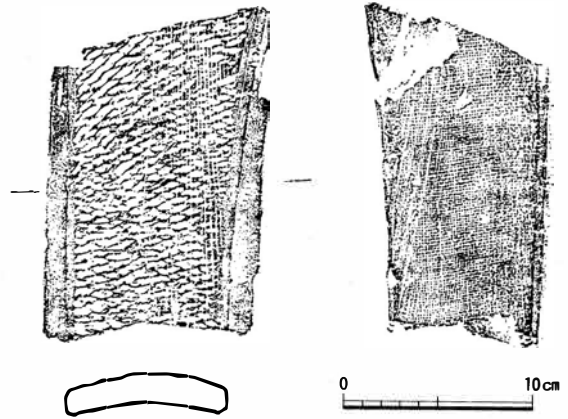
〔壁・床〕 壁は北壁西半部・北西コーナー部は後世の溝の攪乱で切られほとんど残っていないが、他は比較的良好な状態で検出された。東壁で27~37cm、西壁で22~26cm南壁で約38cm、北壁が20~25cmとなっており、床面からの角度は90°~110°を有している。

床は黄色ロームと黒色土混りの硬くたたき占められたほぼ平坦な面で、貼り床の可能性がある。

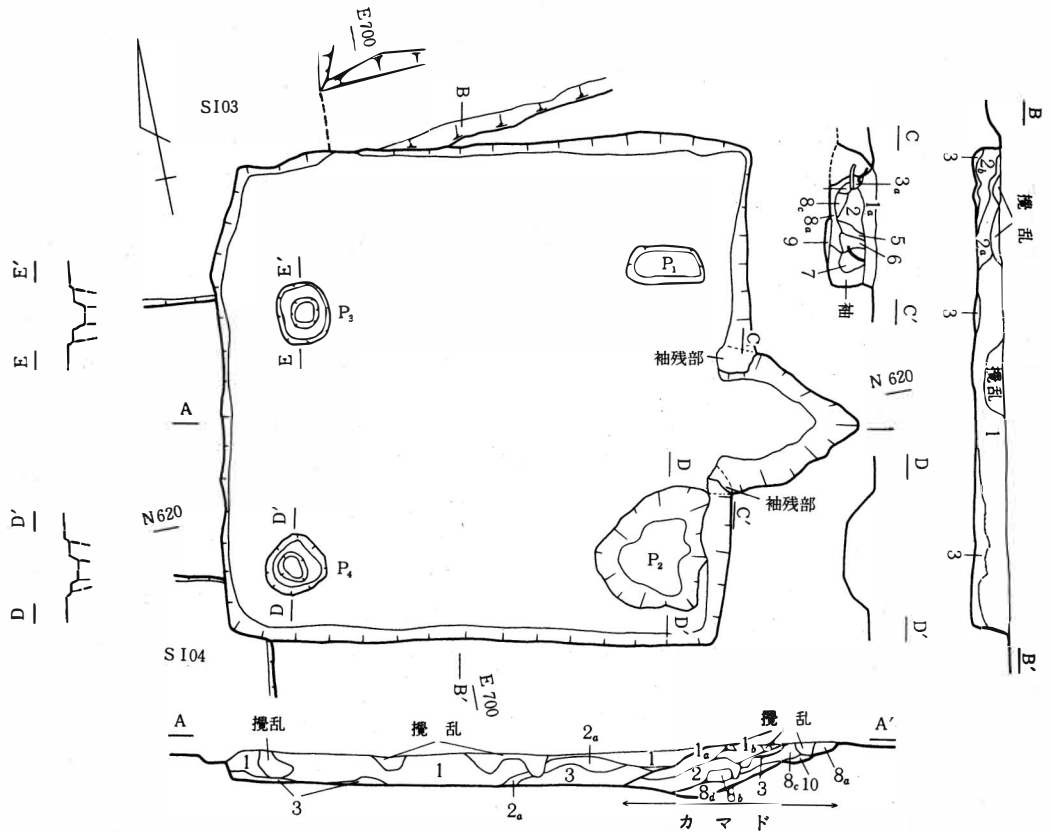
〔ピット〕 カマド右側のP₂浅く炭化物、焼土混り土が堆積し、その下はロームブロックに黒土混り土が堆積している。下層はピットの埋土で、上層のみ貯蔵穴として機能していた時期の堆積土と考えられる。

P₂、P₃はそれぞれ48×43cmの掘り形内に直径20~23cmの柱痕らしきものが検出されており、柱穴と考えられる。P₁は性格不明の浅いピットである。

〔カマド〕 東壁中部にあり、壁より外に向て「V」形に振り込まれている。上面では幅、奥行1.1m、床面で幅60cm、奥行75cm、深さ約30cmを測る。床及び壁面は焼けて赤変しており、カマド全面の床にも若干の焼け面が見られ、その周辺に焼土が分布している。カマド両側の壁面にはカマドの袖が切り取られた痕跡らしい焼けの見られない住居内側への若干の張出しが見られ、袖は住居廃絶時、又はその後に破壊されたものと考えられる。カマド内堆積土中からは土師器甕、支柱と考えられる焼けた河原石等が出土している。



第15図 SI01出土



住居跡覆土

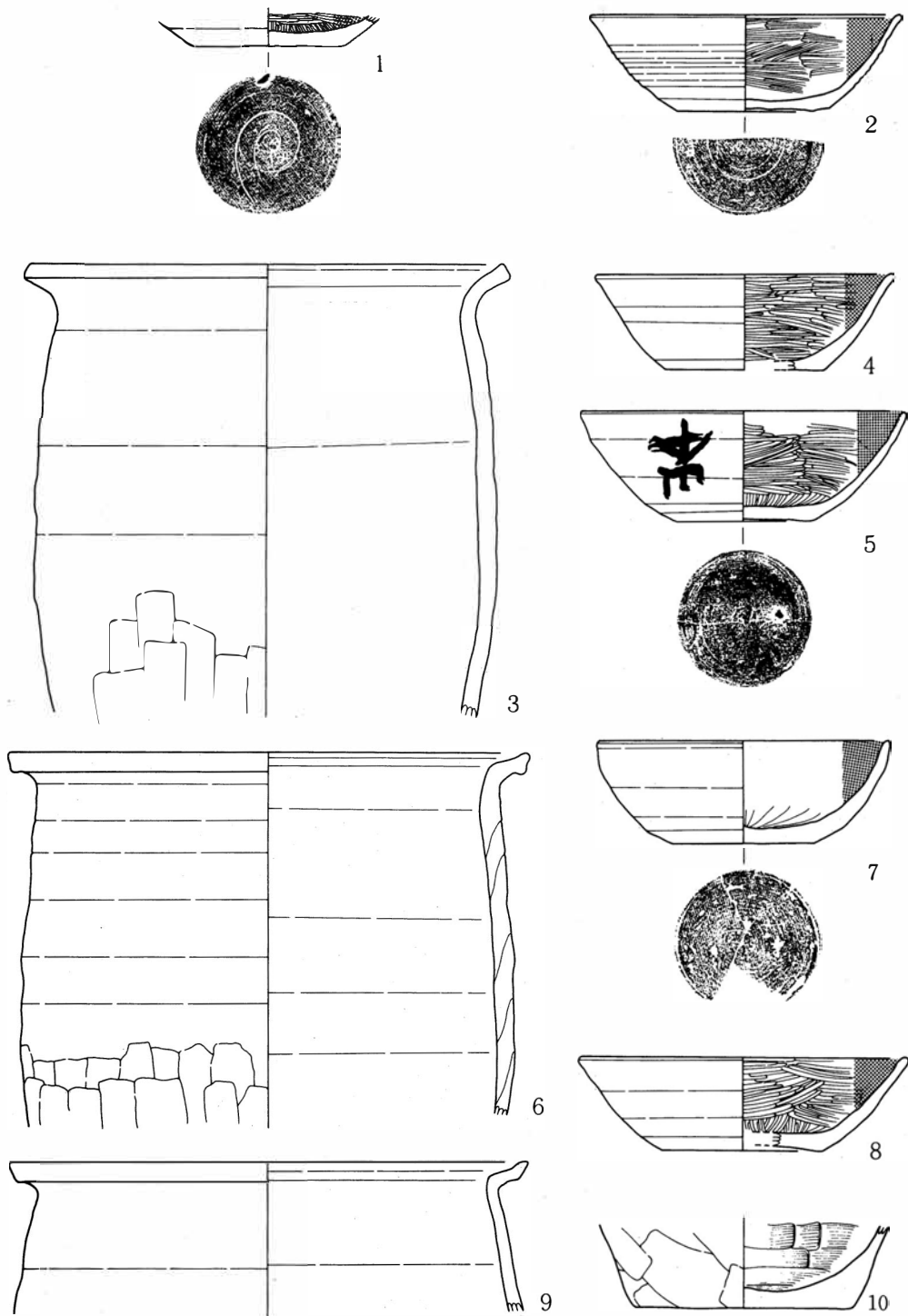
- 第1層 黒褐色土 軽質、粒子細く粘性なし。ローム・焼土粒を含む。
- 第2層 暗褐色土 やや軟質、やや粘性あり。ローム・焼土粒・灰を含む。
- 第2_a層 〃 やや軟質。2_a層よりやや暗く、ローム・焼土粒・灰が少ない。
- 第3層 黒褐色土 軟質、やや粘性あり。ローム粒、若干の焼土・炭化物粒を含む。

カマド覆土

- 第1層 暗褐色土 粘性、しまりなし。ローム・焼土粒を含む。
- 第1_a層 暗黄褐色土 1_a層に黄色粘土の粒子を含む。
- 第2層 暗黒褐色土 やや粘性、しまりあり。焼土・ローム粒・黄白色粘土ブロックを含む。
- 第3層 黄褐色粘土 一部火を受け赤変している。
- 第3_b層 〃 天井の落ち込み、火を受け一部が強く焼きしまっている。
- 第4層 褐色土 粘性強く、しまりなし。若干の焼土・炭化物・粘土粒を含む。
- 第5層 暗黒褐色土 やや粘性あり、しまりなし。焼土粒を多く含む。
- 第6層 暗黄褐色土 やや粘性、しまりあり。焼土を若干含む。
- 第7層 暗褐色土 粘性、しまりあり。褐色土・焼土・黄褐色土のブロック状混合層。
- 第8層 暗赤褐色土 粘性、しまりなし。焼土を多く含む。
- 第8_a層 〃 しまりなく若干の粘性がある。砂質で焼土を含む。
- 第8_b層 赤褐色土 粘性、しまりあり。黄・灰色粘土小ブロックを含む焼土層。
- 第8_c層 〃 粘性、しまりあり。炭化物を含む焼土層。
- 第9層 黒褐色土 粘性、しまりなし。焼土粒を含む。カマド以前のピット埋土。
- 第10層 〃 粘性、しまり少ない。焼土・ローム粒を若干含む。

第16図 SI02





第17図 SI02出土遺物 1~3・6 カマド出土 4・5・7 床面直上層出土
 1・2・4・5・7・8 土師器杯 3・6・9・10 土師器甕 (縮尺 1/2)

出土遺物 (第17図 第19図版)

遺構に伴う遺物 (1~3)

土師器

杯、カマドと床面より若干出土している。1・2はカマド出土で、底面に回転ヘラ削り再調整の加えられたロクロ杯1類である。その他に同類の底部破片が5個体分出土しており、遺構に伴う杯は1類が6個体ということになる。

甕、実測可能なものはカマドより2個体出土している。3・6ともロクロ調整のもので、ともに体部外面下半分に縦方向の削りが加えられている。3は口縁が外反し、断面は「コ」形を呈する。6は短い口縁がほぼ水平近くまで外反し、口唇の両端が若干突出している。

瓦 (第18図)

丸瓦第1類が1点、カマド左壁近くより出土している。表面に焼けた粘土が付着し、全面が焼けており、袖か天井の部材として用いられていたものと考えられる。



床面上層出土遺物

(4・5・7)

土師器

杯、床面上層より実測可



第4表 S I 02出土土器一覧表

第18-A図 SI02出土

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 単位cm				備 考		
							口径	頸部径	胴径	底径		高さ	高台径
17	1		土師器	杯	カマド				6.4				
〃	2	17-6	〃	〃	〃		13.4		6.0	4.2			
〃	3		〃	甕	〃		20.8	18.4	20.4				
〃	4		〃	杯		床直	13.2		7.1	4.1			
〃	5	17-7	〃	〃		〃	14.2		6.0	4.8			「岑」墨書
〃	6		〃	甕	カマド		22.8	20.4	21.8				
〃	7		〃	杯		床直	12.6		6.2	4.5			
〃	8		〃	〃		ℓ-2	14.3		7.0	4.0			
〃	9		〃	甕			22.6	20.4					
〃	10		〃	〃		ℓ--2・3			9.4				

能な土師器杯3点(4・5・7)が出土している。4点ともロクロ調整で、体部下半～底面に回転ヘラ削り再調整が加えられたロクロ杯1類である。5は体部に「岑」の墨書が見られる。

覆土出土遺物 (第17・18図)

土師器

杯、実測できたのは1点のみ(8)で、ロクロ杯1類である。

甕、体部下端外面に縦方向の削りのある10とロクロ調整の体部上半～口縁の破片(9)の2点のみが実測できた。9の口縁は短かく水平近くまで外反し、口唇上端はつまみあげたような形になっている。



第18-B図

SI02 覆土出土形代 (1/2)

瓦、丸瓦1類、平瓦2類各2点、平瓦5類1点が出土している。これらはすべて少破片である。

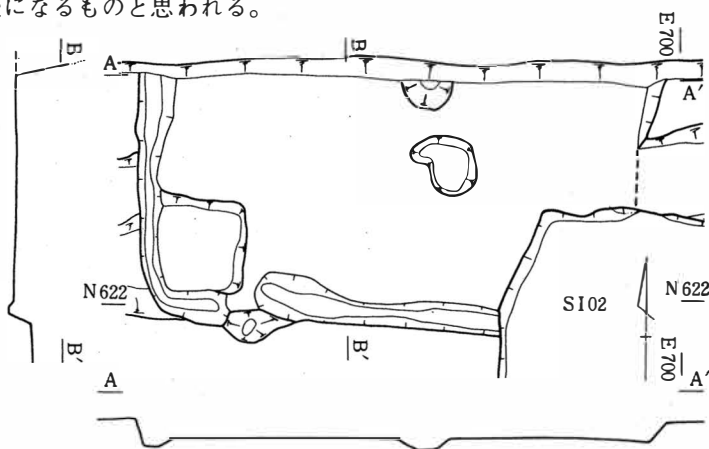
形代 北西コーナー近くの覆土第2層より出土した粘板岩製形代で、長さ11.1cm、幅3.0cm身の部分で0.65cmの厚さがある。右下の部分は削られ茎の形が作られ「刀」と考えられる。これはその後砥石に再利用されている。

S I 03 (第19図)

〔検出状況〕 第3トレンチ北壁沿に半分検出された竪穴住居跡で、北半分は調査区外であった。南東コーナー部はS I 02に切られ、また南壁から約1.5mの範囲は後世の溝による攪乱で床面直上まで切られていた。

〔プラン〕 東西4.2m、南北2m以上の方形プランになるものと考えられる。カマドは見られないが、床面の痕跡から東壁に作られていたものと考えられる。方位は残存する南壁、西壁の一部から推定してN-3°-E前後になるものと思われる。

〔覆土〕 検出され部分のほとんどは攪乱が床面直上まで及んでいたが、南壁沿の東半部とトレンチ壁沿では深さ10~15cmで覆土の残存が見られた。覆土は2層に分けられ、上層は黒褐色の粘性のないやや軟質土、下層は床面の上に2~3cmの厚さで見られる粘性のある暗褐色土である。



第19図 SI03

0 1m

〔壁・床〕 壁はS I 02に切

られた部分と攪乱を受けて削平された部分が多く、東西壁のトレンチ壁沿約50cm、南壁の東半部約1.2mを残すのみである。東壁では深さ10~15cmで床面からの角度130°、西壁で約10cm、107°、南壁で約15cm、116°を測る。

床は所々攪乱を受けているが、保存は良好で、汚たロームのたたき占められた硬い平坦な面となっている。

〔周溝〕 西壁と南壁沿に見られ、南壁の西半部で途切れている。南壁沿で幅18~35cm、深さ5~10cm、西壁沿で幅15~30cm、深さ約10cmを測る。

〔カマド〕 検出された部分にカマドは見られないが、東壁がS I 02に切られた部分付近の床面が焼けており、ここにカマドのあった可能性がある。

遺構に伴なう遺物 (第20図1 図版)

土師器 (第20図1)

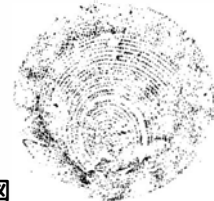
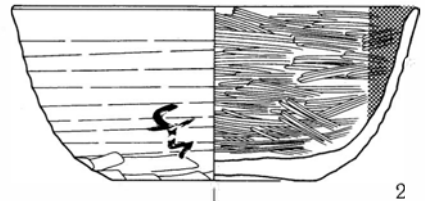
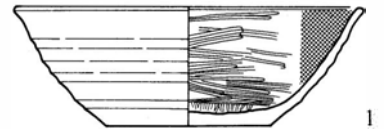
杯 床面出土のもので、体部下半~底面に回転ヘラ削り再調整が加えられたロクロ杯1類である。外面のロクロ目は細く、内黒で入念なミガキが加えられている。

覆土出土の遺物

土師器 (第20図2)

杯 ロクロ調整のもので、やや大ぶりで深い形を呈している。回転糸切りの後、体部下端部及び底面周縁部に手持ちヘラ削りの加えられたロクロ杯46類である。

瓦 丸瓦3類、平瓦1c、2、3a類各1点、平瓦5類が2点出土している。



第20図

SI03出土遺物 1 床面出土
2 覆土出土 1・2 土師器杯
(縮小 1/2)

第5表 S I 03出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 単位cm						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
20	1		土師器	杯		床面	13.4			6.4	4.6			
〃	2	17-8	〃	〃		ℓ-1	15.6			8.0	6.8			「字」墨書

S I 04 (第21図 第5図版)

〔検出状況〕 第3トレンチ東央部より検出された竪穴住居跡で、北東コーナーはS I 02に切られ、北西コーナーではS I 01と重複しているが重複部分が少なく前後関係は不明である。

また、住居跡の上部もかなり攪乱を受けており、検出できたのは床直上の部分だけであった。

〔プラン〕 残存する床面の形態からして東西3.6m、南北3.75mの方角プランを呈するものと考えられ、方位は残存する西壁からしてN-7.5°-Eを取ると考えられる。

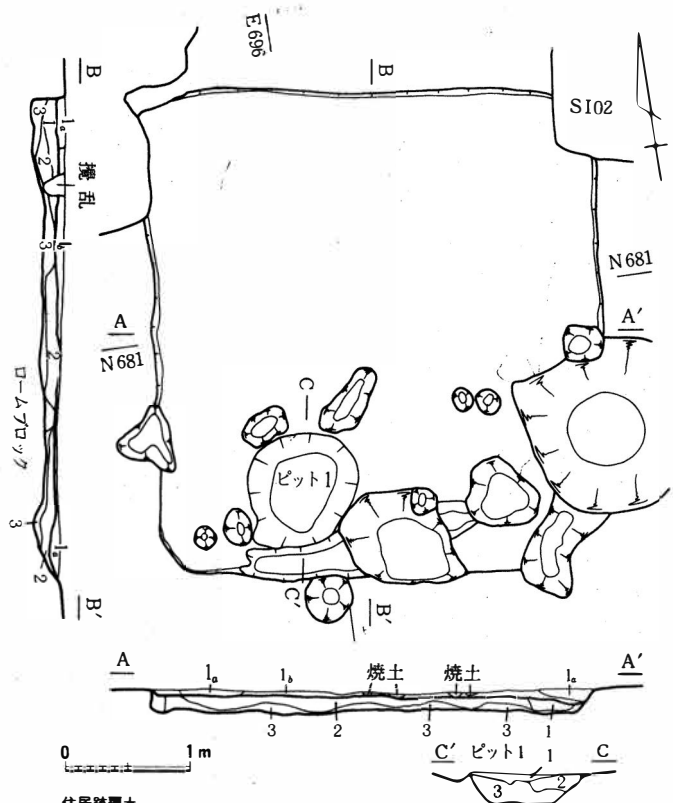
〔覆土〕 削平されほとんど残っておらず、残存が良好な部分で5cm、所によっては床面が検出面になっている部分もある。

〔壁・床〕 壁はほとんど残っておらず不明である。

床は中央部が汚れたロームをたたきしめた面でかなり硬い貼り床となっているが、周辺部は同じ質の土が埋めてあるにもかかわらずたたきが弱いらしく軟弱な床面となっている。

〔周溝〕 南壁の一部に沿って幅30~40cm、深さ約5cmの溝状の部分があるが周溝かどうかは不明である。

〔ピット〕 南西コーナー近くより直径90cm、底径65×50cm、深さ25cmのピットが検出されたが、この埋土 $l-1$ は貼り床と同質で上面が硬くたたき占められており、住居跡使用以前のものと考えられる。



- 住居跡覆土
- 1層 黒褐色土 粘性あり、しまりなし。若干のローム粒を含む。
 - 1_a層 暗黄褐色土 粘性、しまりややあり。ローム・焼土・炭化物粒を含む。
- 床面下埋土
- 1層 暗黄褐色土 やや軟質、粘性あまりなし。ローム粒・若干の焼土・炭化物粒を含む。
 - 2層 黒褐色土 硬質、粘性なし。ロームブロック・焼土・炭化物粒を含み、たたき占められている。
 - 3層 黄褐色土 粘性、しまりあり。ロームブロックと黄褐色土の混り土。
- ピット覆土
- 1層 黄褐色土 硬質、粘性あり。ロームブロックに焼土・炭化物粒を含む。上面はたたき占められ特に硬い。
 - 2層 褐色土 粘性、しまり共に少ない。焼土粒を若干含む。
 - 3層 黒褐色土 粘性、しまりあり。ロームブロックを含む。

第21図 SI04

〔カマド〕 東壁の一部及び南東コーナーを切る攪乱ピットに接する床の一部に焼け面が見られカマドは攪乱ピットにより破壊されたものと考えられる。

〔掘り形〕 全面を断ち割てはしないので細部は不明であるが、ほぼ住居跡と同じ形に床面下8~20cmの深さの底面に凹凸のある掘り方を掘り、そこに埋土をし、上面をたたいて貼床状になっている構造が確認された。

遺構に伴う遺物 (第22・23図)

土師器 (第22図1)

杯 床面出土のもの1点のみであった。体部下半~底面に回転ヘラ削り再調整を加えたロクロ杯1類で、体部は内弯気味に立ち上る。

瓦 (第23図)

平瓦5類が床面より1点出土している。S I 03覆土出土のと接合し、覆土のは強く焼けている。

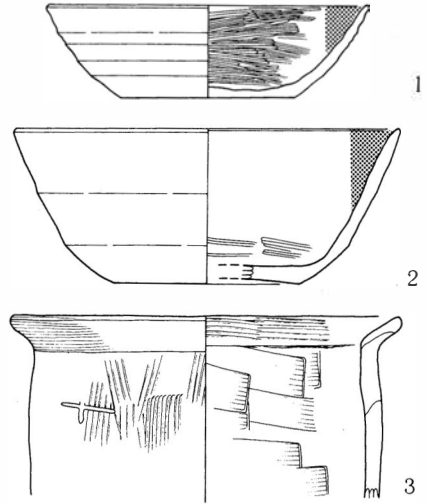
覆土出土の遺物

土師器 (第22図2)

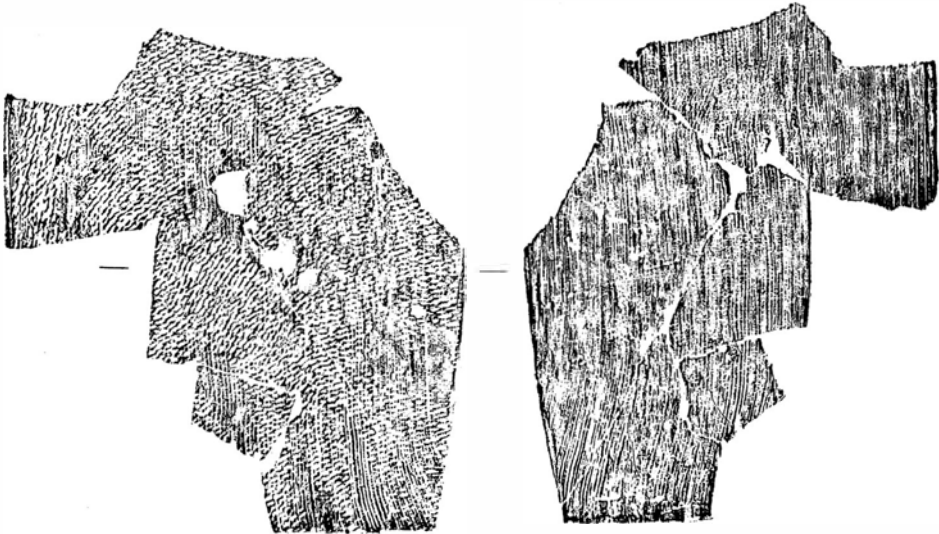
杯 S I 03出土のものと類似した深い器形のもので、体部下半から底部にかけては表面が荒れているが、底面の一部に回転ヘラ削りの痕跡が見られロクロ杯1類と考えられる。内面は再酸化により内黒は消失し赤変している。

瓦

平瓦3 a類の破片2点が出土している。



第22図
S I 04出土遺物 1 床面出土
2-3 覆土出土 1-2 土師器杯
3 土師器甕 (縮尺 1/2)



第23図
S I 04出土

第6表 S I 04出土土器一覧表



図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 単位cm				備 考		
							口径	頸部径	胴径	底径		高さ	高台径
22	1		土師器	杯		床面	12.7			7.0	3.7		
〃	2		〃	〃		ℓ-2	15.4			7.4	6.2		
〃	3		〃	甕		ℓ-1	15.5	13.8	14.3				線刻

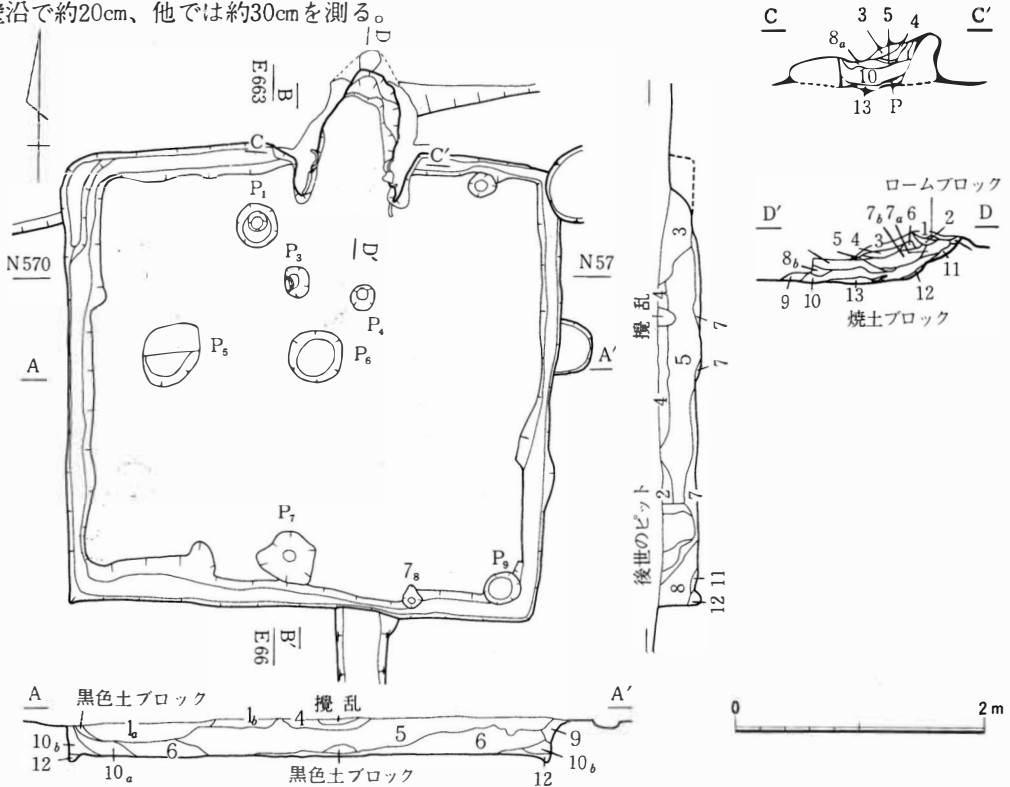
S I 05 (第11・24図 第10~12図版)

〔検出状況〕 第5トレンチの中央部より検出された竪穴住居跡で、検出面はL-Ⅱの下、L-Ⅲの上面である。したがってS I 05が埋没した後にL-Ⅱが堆積したものと考えられる。

S I 05のすぐ北にS X 01があり、S I 05のカマド及び北壁部がS X 01を切っている。

〔プラン〕 東・南北とも3.95mの方形プランを有する。カマドは北壁中央のやや東寄りに作られており、方位は真北を取っている。

〔覆土〕 暗褐色～黒褐色土が、一部ブロック状の様相を呈しながら堆積している。しかし、周辺から流れ込んだと考えることも可能であり、人工堆積か自然堆積かは不明である。厚さは北壁沿で約20cm、他では約30cmを測る。



住居跡覆土

- 1.層 褐色土 粒子細く、粘性あり。若干のローム粒を含む。
- 1_a層 暗褐色土 粒子細く、粘性あり。混入物ほとんどなし。
- 2層 黄褐色土 粘性、しまりなし。粒子粗く、ローム粒を多く含む。
- 3層 黒褐色土 やや粘性あり。粒子粗く、若干のローム・焼土粒を含む。
- 4層 黄褐色土 粘性、しまりなし。ローム粒、ローム小ブロックを多く含む。
- 5層 〃 しまりなく、粘性あり。粒子細くローム小ブロックを多く含む。
- 6層 暗黒褐色土 しまりなく、粘性あり。ローム小ブロックを含む。
- 7層 暗赤褐色土 粘性なく、しまりあり。粒子粗く、ローム・焼土粒を多く含む。
- 7層 粘褐色土 粘性ややあり。粒子粗く、ローム粒を多く含む。
- 9層 黄褐色土 粘性ややあり。粒子細く、ローム、黒色ブロックを含む。
- 10.層 暗黒褐色土 粘性、しまりなし。粒子やや粗く、若干のローム粒を含む。
- 10_a層 黒褐色土 粘性、しまりなし。粒子やや粗く混入物なし。
- 11層 暗赤褐色土 粘性、しまりあり。粒子やや粗く、ローム・焼土粒を多く含む。
- 12層 黒色土 粒子粗く、しまりなし。ロームブロックを含む。

カマド覆土

- 1層 黒色土 粒子細く、やや粘性あり。若干ローム・焼土粒を含む。
- 2層 灰白色土 粒子細く粘性あり。焼土粒を多く含む。
- 3層 黒褐色土 粒子細くやや粘性あり。ローム粒を多く含む。
- 4層 灰白色土 粒子細く粘性あり。焼土を多く含む。カマドの崩壊土。
- 5層 暗赤褐色土 焼土層。カマド崩壊土の一部。
- 6層 〃 焼土層。軟質、しまりなし。
- 7層 〃 焼土層。粒子粗く、黒色土混り。
- 7_a層 〃 焼土層。7_a層より黒色土少ない。
- 8層 暗黒褐色土 粒子細くやや粘性あり。若干のローム・焼土粒を含む。
- 8_a層 黒褐色土 8_a層よりローム・焼土粒が多い。
- 9層 暗灰色土 灰層。粘性なく、焼土粒を多く含む。
- 10層 赤褐色土 焼土層。粒子粗く粘性なし。小ブロック状を程す。
- 11層 黒褐色土 粒子細く粘性あり。若干のローム・焼土粒を含む。
- 12層 灰色土 灰層。軟質で炭化物を含む。

第24図 S I 05

〔壁・床〕 壁は薄い漸移層及び地山の硬質ローム層を掘込んだもので、ほぼ垂直に立ち上っている。床面からの深さは北壁のカマド西側で20cm、西壁中央で23cm、南壁と東壁では30cmを測る。

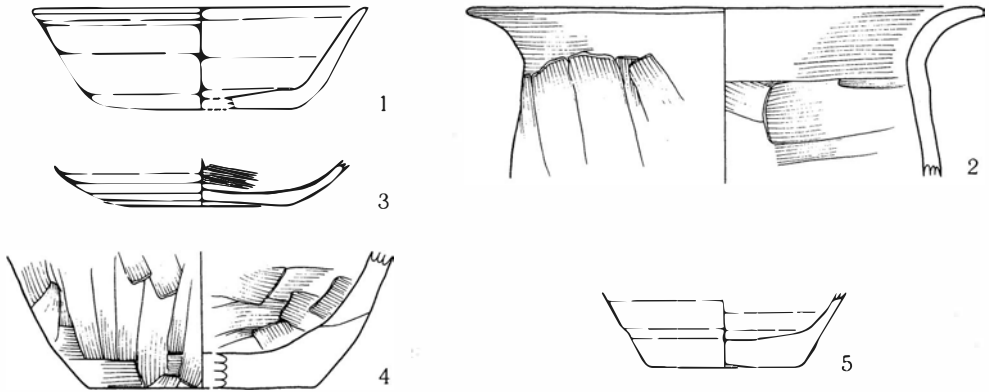
床はローム面をたたき占めた硬い平坦な面であるが、所々ピット状に掘り、ロームを埋め戻してたたき、貼床状にしている部分も見られる。

〔周溝〕 カマドの部分を除く四壁沿に周っており、幅は8～37cmを測り、最大の部分も最小の部分も南壁沿にある。深さは東壁沿で2.5～8.5cm、西壁沿で3～8.5cm、南壁沿で4～10cm、北壁沿で3～8cmを測る。覆土は全体的にロームブロックを含む黒色土である。

〔ピット〕 住居跡内からは9個のピットが検出され、直径約20cmまでのP₂～P₄・P₈・P₉、直径30cm以上のP₁～P₇があるが、性格は不明である。

その他に、東壁沿に地上ロームを埋めて上面をたたいた不定形ピットが3ヶ所見られる。

〔カマド〕 北壁中央よりやや東寄りに作られており、カマド全体の $\frac{1}{3}$ は袖を伴ない住居跡の掘り込の内側、 $\frac{2}{3}$ は外側に作られている。外側の部分もS X 01の覆土を切っているため火の当る部分は10～15cmの厚さで粘土質の土を貼っている。袖の内側の部分には平瓦、丸瓦が埋め込まれている。大きさは焚口で上面幅70cm、床面幅60cm、奥行は上面で105cm、床面で78cm、深さ38cmを測る。



第25図 SI05出土遺物 1・2 カマド出土 3～5 覆土出土 1・5 須恵器
3 土師器杯 2・4 土師器甕 (縮尺 $\frac{1}{3}$)

第7表 S I 05出土土器一覽表

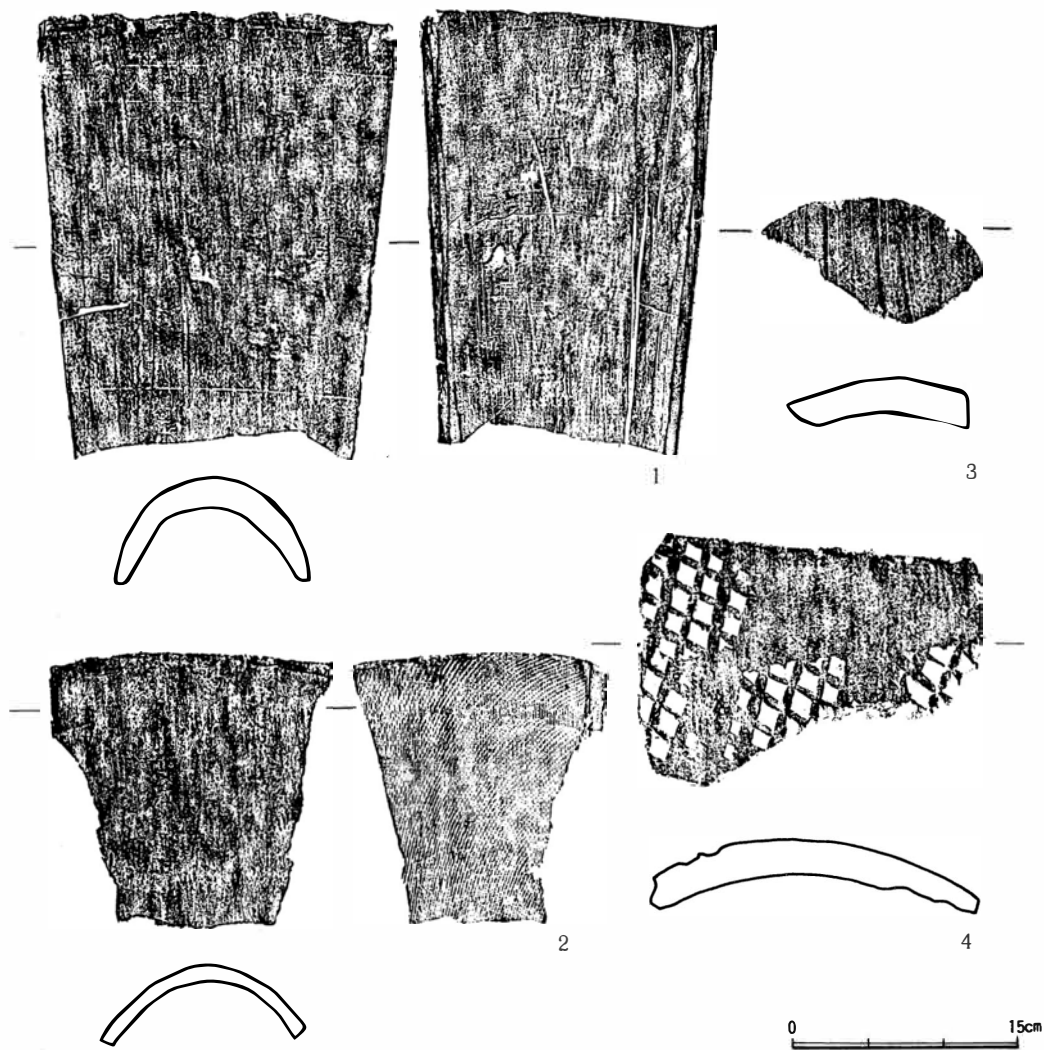
図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 単位cm						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
25	1		須恵器	杯	カマド		13.0			7.2	3.1			
〃	2		土師器	甕	〃		20.4	16.1						
〃	3		〃	杯		ℓ-4				7.0				
〃	4		〃	甕		ℓ-3				9.2				木葉痕
〃	5		須恵器	壺(?)		ℓ-1				5.8				

遺構に伴なう遺物 (第25・26図)

土師器

杯 遺構に伴なうのはカマド出土のロクロ杯1 (1c?) 類、非ロクロ無段丸底杯の小片各1点、貼り床状ピット内より非ロクロ無段丸底杯1点が出土したのみである。非ロクロ杯は口唇部直下まで削りが及んでいるものである。

甕 調整にロクロを用いないもので、頸部はゆるやかに外反し、口唇近くはほぼ水平になっており、口唇部の断面は「つ」形を呈する。調整は頸部、口縁部は連続した横ナデ、体部外面は縦方向、内面は横方向のナデが加えられている。



第26図 SI05出土瓦 1・2丸瓦 3・4平瓦

須恵器 (第25図1)

杯 カマド出土の平底のもので、体部下半はやや丸味を帯び、口縁は外反する。底面には回転ヘラ切痕を残している。

瓦 (第24図1～4)

遺構に伴うものはすべてカマドの袖出土で、丸瓦1類2点(1・2)、平瓦2類1点(3)、3b類1点(4)が出土しており、丸瓦1点(2)と平瓦は焼けているが、丸瓦1点(1)は内面に若干焼土が付着しているのみでほとんど焼けてはいない。

覆土出土の遺物 (第25図)

土師器 (第25図2)

甕 実測できたのは体部下半から底部にかけての破片1点である。底面は平らで厚く、体部外面は縦方向、内面は横方向のナデが加えられている。

須恵器 (第25図3)

器形は不明であるが、厚手の底面を有する底部の破片である。底面には回転ヘラ切の痕跡を残している。

瓦 丸瓦1類4点、3類3点、平瓦1c類が2点出土している。

S I 06 (第27図)

〔検出状況〕 第5トレンチの東側拡張部分に検出された住居跡である。本住居跡の東側及び南側は、調査区外である。S I 07に切られており、北西には、S I 05とS X 01が位置している。住居跡内覆土の上層には、L-I aからL-IIまでの4層が堆積しており、L-IIの黒色土は粘性のあるシルト質の土層で、旧表土と考えられる。その下層のL-III上面で遺構が検出されている。

〔プラン・規模・方向〕 東側及び南側が、調査区外であるため正確な規模は不明であるが、検出部分は東西約2.2m、南北約2.4mを測り、隅丸方形を呈すると思われる。西壁の軸線方向はN-20°-Wを向く。また、カマドや貯蔵穴等は検出されなかった。

〔覆土〕 S I 06の覆土はS I 07の覆土により切られているため全体的な層序は、明らかではないが、ほぼレンズ状に堆積しており自然堆積を示している。第5層を除き各層には、ローム粒と焼土粒を含んでいる。第5層は周溝内覆土である。

〔壁・床面〕 壁は地山を掘り込んで作られており、遺存状態は大変良い。立ち上がり角度は、約100°を測りほぼ垂直である。床面には地山を叩きしめて作られており、平坦である。東側部には、ピットらしき落ち込みが見られるが、その性格は不明である。

〔周溝〕 調査部分の北壁、西壁にそって周溝が検出された。最大幅約35cm、最小幅約15cm床面からの深さが約10cmを測る。覆土は、暗黄褐色土で粒子が細かく、ローム粒子を含む。

遺構に伴う遺物

実測可能な土器は、2個体のみであるが、床面より土師器杯の細片が、数片出土している。また、須恵器も杯片が2点みられる。

土師器 (第28図1・2 第19図版)

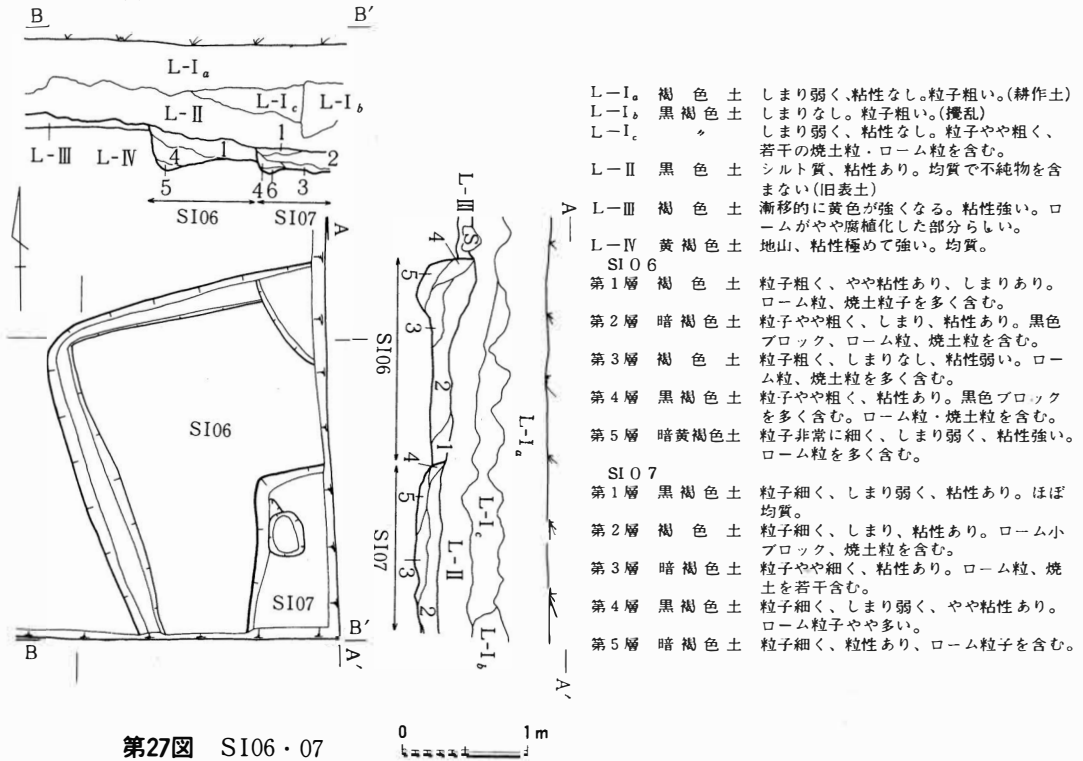
杯 1・2は床面出土のロクロ調整による内黒平底杯である。1は全体の約70%、2は全体の約10%を残す。1は内弯気味に立ち上がり口縁部でわずかに外傾する器形を呈する愚書土器で判続不明である。2点共底部切り離しは、回転糸切りで、体部下半には手持ちヘラ削りの再調整が施され4b類に分類される。内面は、底部が放射状の細かいミガキである。

覆土出土の遺物

覆土からは、実測は不可能であるがロクロ使用の土師器甕の底部が出土しており、静止糸切り痕が見られる。また、須恵器甕の体部破片が出土しており、体部外面にタタキ目が施されている。瓦は覆土より2類の瓦が1点出土しているのみである。

土師器 (第28図4~5 図版)

杯 4は0-1出土のロクロ調整平底杯である。底部から体部下端に回転ヘラケズリの再調整が施されており、底部切り離し不明の1類である。内面は細かいミガキで黒色処理が再酸化のためとび橙褐色を呈している。

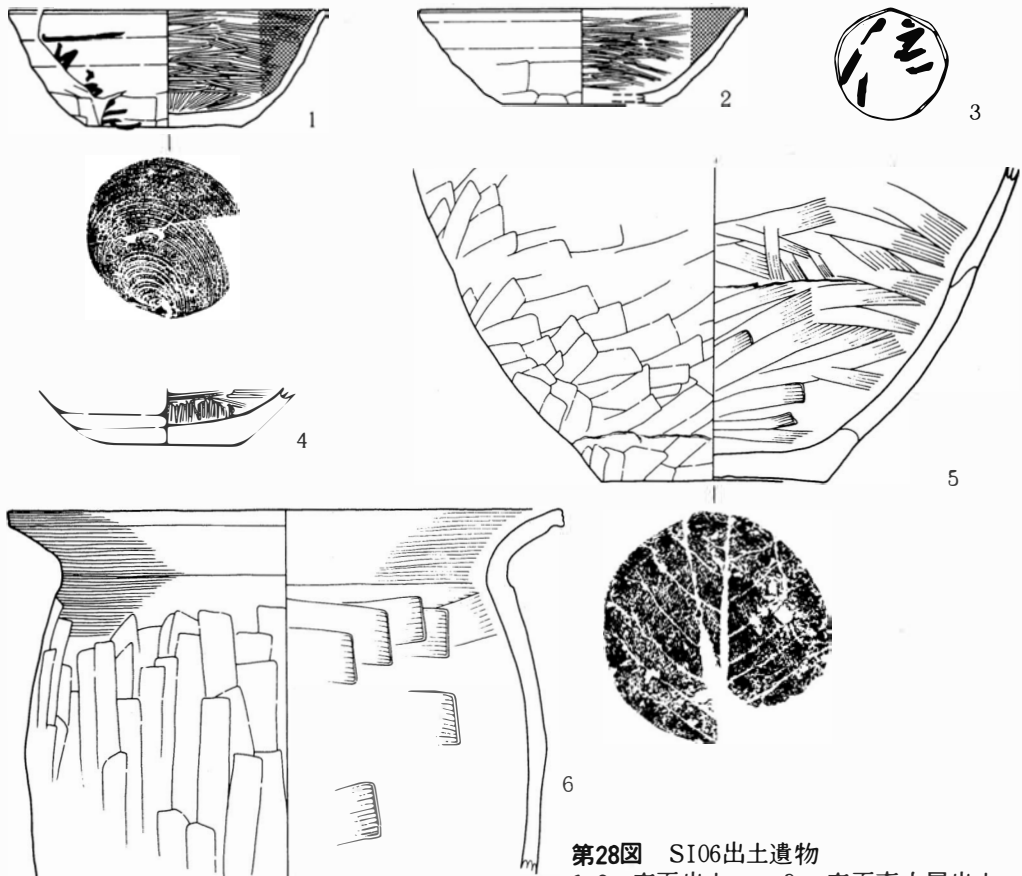


第27図 SI06・07

甕 5・6は、 $\ell-1$ 出土の非ロクロ甕である。5は底部から体部下半の約40%、6は体部上半から口縁部の約30%を残す。5の残存部器形は内弯気味に立ち上がる。底部は木葉痕が見られ、体部外面には横方向の手持ちヘラケズリ、内面にはナデの再調整が施されている。焼成が良好で非常に硬質である。6は体部上半が内弯し、口縁部に至り外反する器形を残す。体部外面は口縁部近くまで縦方向の手持ちヘラケズリが施され、内面はナデである。

土製品 (第28図3)

円板状土製品 床面直上層出土で、ロクロ調整平底杯の底部外面に墨書を持つ。土器の底部を利用したものである墨書は器面の摩滅と黒斑のため判読が難しい。底部は回転ヘラケズリの再調整が施され、外周はケズリの加工痕が見られる。内面は黒色処理で放射状のミガキである。



第28図 SI06出土遺物

1・2 床面出土 3 床面直上層出土
4～6 覆土出土 1・2・4 土師器杯
3 土製品 5・6 土師器甕

(縮尺 1/2)

第8表 S I 06出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 単位cm						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
28	1	17-9	土師器	杯		床面	12.6			6.2	4.7			不明墨書
〃	2		〃	〃		〃	13.0			6.4	3.8			
〃	3		〃	円盤形土製品		床直				直径4.3				不明墨書
〃	4		〃	杯		ℓ-1				5.6				
〃	5		〃	甕		〃				9.0				木葉痕
〃	6		〃	〃		〃	22.0	17.8	20.8					

S I 07 (第27図 第10図版)

〔検出状況〕 第5号トレンチの東側拡張部に検出されたS I 06を切った状態で検出された住居跡である。遺構検出面は、S I 06同様、L-Ⅲ上面である。

〔プラン・規模・方向〕 東側と南側が調査区外で、遺構が確認された部分は、東西約0.5m、南北約1.2mとわずかである。そのためプラン、規模、方向は不明である。

〔覆土〕 覆土は、遺構が発掘された部分がわずかであるためこの層序が全体的なものであるかどうかは不明であるが、堆積状態はレンズ状の自然堆積を示している。土層は粒子が細かく粘性を持ちローム粒子を含む。

〔壁・床面〕 壁は、S I 06の覆土を掘り込んで作られており、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は貼り床は認められず、地山を叩きしめて作られており、やや凸凹している。

〔ピット〕 1個のピットが検出されているが、その性格は不明である。

第2節 工房跡

S X 01

S X 01は今回調査地区内での唯一の工房跡である。第5トレンチ内の一番北側より、S I 05の竪穴住居跡に切られる形で検出された。S X 01とS I 05は同一レベルでプランを確認することができたが、それは両遺構が時期的にそう離れていない上に、耕作土による攪乱の影響を受けているからであろう。

S X 01の規模は、長辺中央部で約8.7m、短辺は多少所により異なるが約2.8～3.0mであり、隅丸長方形プランを有する。方位は長径が東西方向を示し、短径は南北方向を示している。南辺の中央部付近はS I 05のカマド煙道で切られており、かつその東側の南辺は長方形プランの中に入りこむような形となっているので、南辺の線は一直線でなくなってくる。

プラン内の覆土は9つの層に分れ、いずれもローム粒と木炭粒を含んでいる。最下層の第10層になると、焼土層が入っている。遺物はこの各層に含まれているが、土師器・須恵器・羽口・鉄

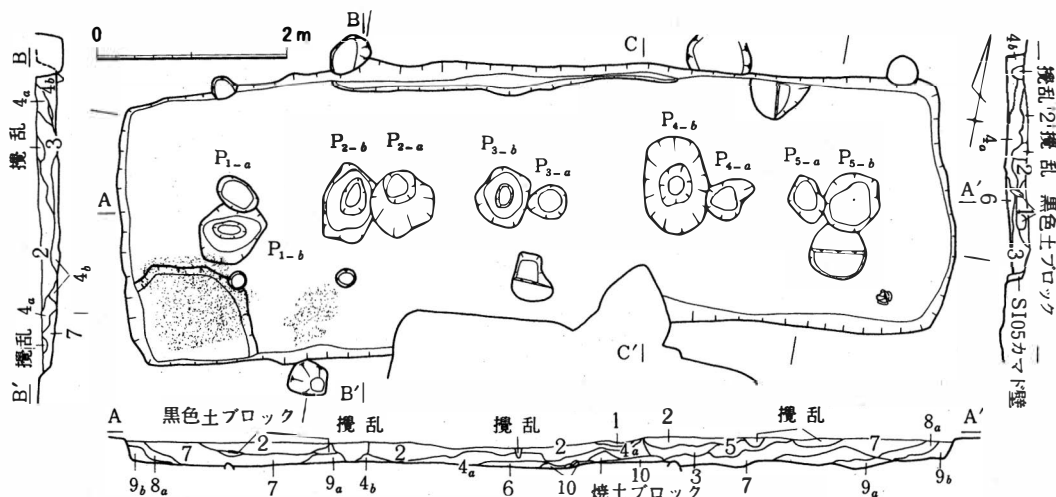
滓などである。工房の壁はほぼ垂直に立ちあがり、北側の壁直下には約3.6mの長さの溝がある。この溝の両端に位置してプランの北側には柱穴と思われるピットがあり、この部分が入り口と考えられる。床面はかならずしも平坦ではなく凸凹があり、南西隅には1m四方の浅いピット部分があり、特に木炭片が多かった。

遺構の中心となるのは、プランの長径中心線に沿って、5個所に2基ずつセットとなる10基の炉跡である。2基のセットは時期を前後する切り合い関係にある鍛冶炉と思われるものである。5組のうち両端をのぞく3組の炉は、東側が新しく西側が古い。また、炉の使用度を考えると、新しい方が焼け具合が少ないので、古い炉は耐用度がすぎたため隣接して新設したものであろう。一番保存状態のよかった P_{4-b} について説明する。炉は長径104cm、短径70cmの長円形で粘土で四周を固めてある。炉底はかなり赤く焼け、その周辺上部は青灰色に焼けている。これは中心部は酸化焰で周辺部は還元焰焼成となっているからである。炉の上縁部に一部凹んでいる部分があり、ちょうど羽口の太さに該当する。ただ1基の炉に何ヶの羽口があったかは確定できない。

出土遺物

土師器 (第31図2~13 第32図15~20)

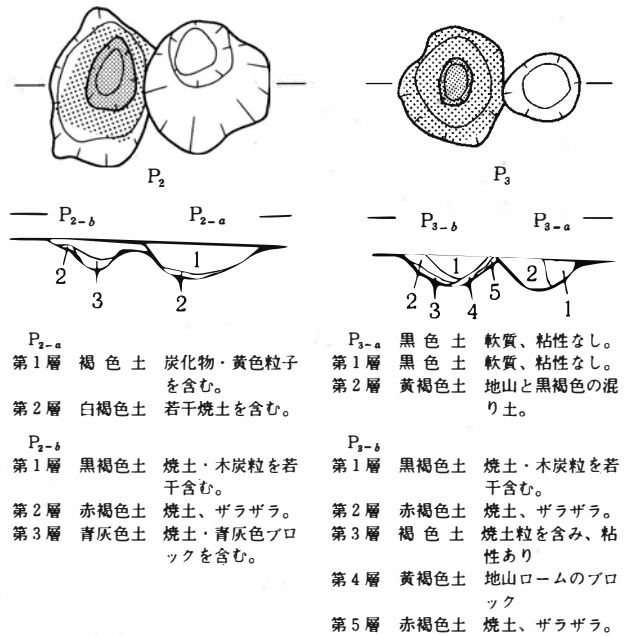
覆土内の上層にふくまれるものが、圧倒的に多い。器種は杯と甕の2種のみで、杯は平均すると60%程度の遺存率を示すのに対し、甕は40%しか残っていないという相違点がある。



- | | | | |
|-----------|-----------------------------------|-----------|------------------------------------|
| 第1層 黒色土 | 粘性、しまりあり。若干ローム粒を含む。 | 第7層 黒褐色土 | 粘性、しまりあり。大粒の木炭粒・焼土粒・ローム粒を含む。 |
| 第2層 黒褐色土 | 粘性あり、しまりなし。ローム粒・焼土粒、やや大粒の木炭粒を含む。 | 第8層 褐色土 | 粘性、しまりあり。ローム粒・若干の木炭粒を含む。 |
| 第3層 暗赤褐色土 | 焼土層。粘性あり、しまりなし。粒子はやや粗く、若干の木炭粒を含む。 | 第8層 暗褐色土 | 粘性、しまりあり。粒子細く、若干のローム粒・木炭粒を含む。 |
| 第4層 褐色土 | 粘性、しまりあり。多くのローム粒・若干の木炭粒を含む。 | 第9層 黒褐色土 | 粘性あり、しまりなく軟かい。木炭・若干のローム粒・焼土粒を含む。 |
| 第4層 | 粘性、しまりあり。多くのローム粒・若干の焼土粒・木炭粒を含む。 | 第9層 | 粘性あり、しまりなく軟かい。木炭粒・ローム粒を含む。 |
| 第5層 黒褐色土 | 粘性、しまりあり。粒子細く、若干のローム粒を含む。 | 第10層 褐色土層 | 粘性あり、しまりなくボソボソしている。ローム粒・若干の焼土粒を含む。 |
| 第6層 黒褐色土 | 粘性、しまりあり。多くの木炭・焼土を含む。 | | |

第29図 SX01

杯、2種に大別可能である。1つは非ロクロ調整の丸底及び平底風丸底で、有段と無段の体部を持つものがある。口縁部はヨコナデ、体部から底部にかけてケズリを加え、内面はいずれもミガキを施してある。有段丸底をのぞいてはいずれも内黒杯である。もう1種の杯は、ロクロ調整の杯である。本報告に図示したものは主なもので、他にも復元可能なものがある。分類では非ロクロの平底風丸底とロクロ整形杯の1c類に属するものが圧倒的に多く、 $\ell-1$ ・ $\ell-2$ よりの出土が大部分を占める。



第30図

特色としてはロクロ整形杯体部に「小」の線刻記号あるものが3点と底面に「大」の線刻文字のあるものが1点みられることがある。また、杯口縁部とその内側に一部削られたような破損部分が顕著にみられることがある。(第31図7・8・9)これは口縁部に何かを当てて引っぱった時にできたものかも知れないが、その具体的利用方法は不明である。

甕 図示した甕はすべて $\ell-1$ 出土のものである。体部調整はハケメの甕とケズリの甕がほぼ半々である。

須恵器 (第31図1 第31図14 第32図21)

杯 内外面をロクロ調整した後、体部から底部にかけて回転ヘラケズリで仕上げている。底面にはケズリ残しの粘土が少量残っている。灰茶色を呈する杯で、技法的には土師器のロクロ整形杯の1類と同様である。これのみがb区床面より出土している。

壺 内外面をロクロ調整してある壺の下半分のみが残存している。焼成時の自然釉らしい部分がある。暗灰色を呈する。 $\ell-3$ の出土である。

甕 $\ell-1$ の出土で80%の遺存率を示す。再酸化したため外面は橙茶褐色を呈している。胴部最大径は中央よりやや上部にある。調整は口縁部はロクロ痕を残し、他は平行タタキ目である。内面はロクロナデを施してある。

羽口 (第33図)

完全な形で残っているのは1ケもないが、SX01より出土している羽口の復元個体数は13ヶ前

後である。粘土板を丸めて円筒形にしたものであるが、一枚板でなく2～4にわけたものを合わせたように見える。内側穴部はナデによる整形痕がみられ、外側は一般に縦にケズリを加えている。ただ基部の太くなっている部分のみは内面にもケズリを加えている。一例のみ外側をケズリでなく、ナデで整形しているものがある。先端部は鉍物質の融解物が付着するのは通有である。

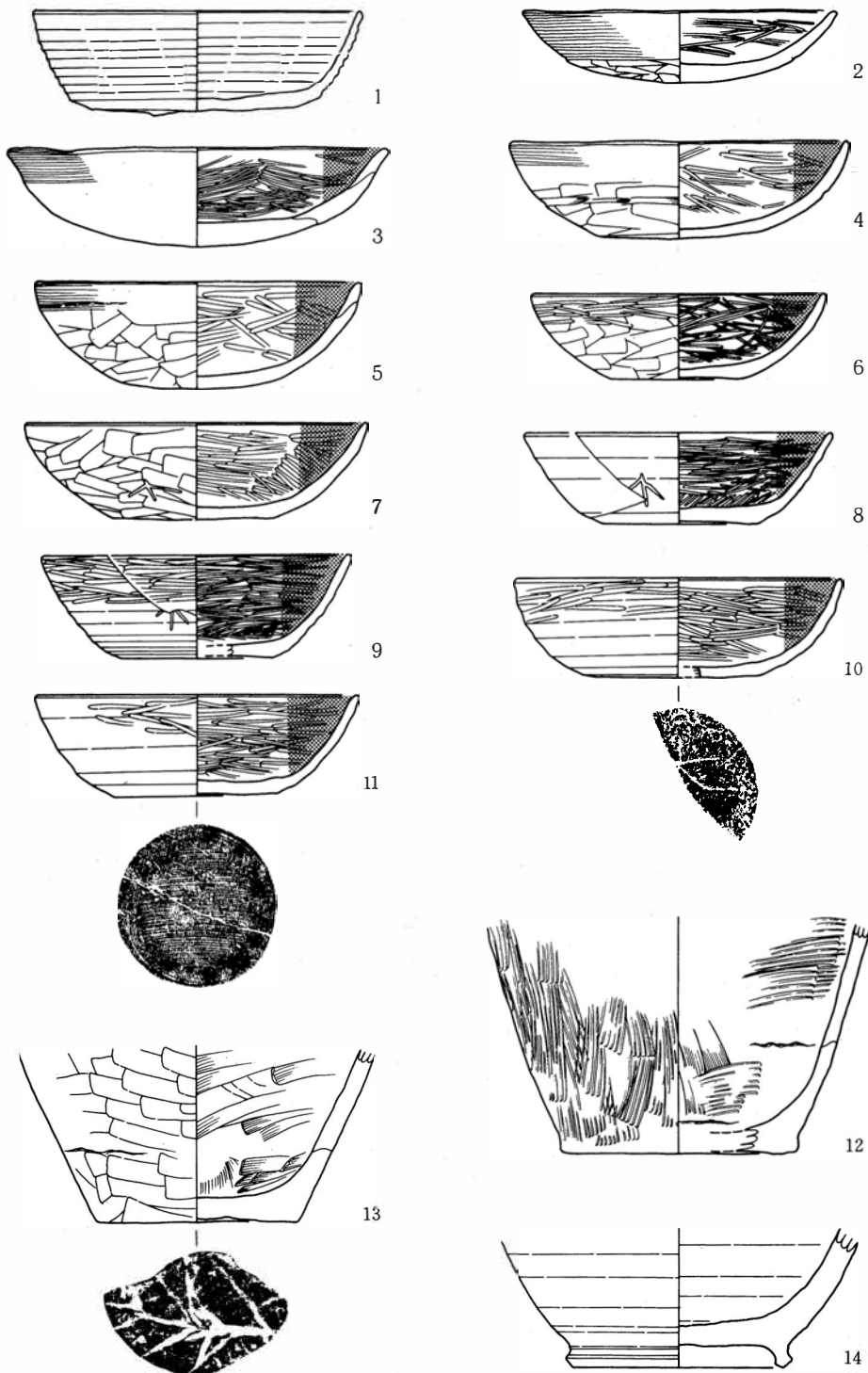
羽口の複元径は、全長13.0cm、先端部径5.0cm口径2.7cm、基部径8.4cm口径5.5cmとなっている。多くはℓ-1よりの出土であるが、床面出土のものも3点ある。

工房跡の年代観

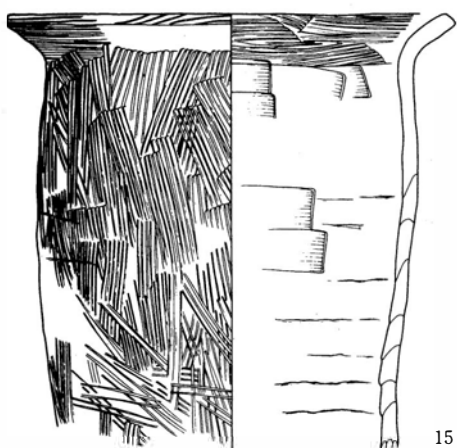
羽口や鉄滓の表面的観察から、その実年代を求めることは今の所できない。工房の稼動時期を知るための資料としては床面出土の次に記す土器がある。土師器片としては、2点の蓋の小破片がある。両面黒色でていねいに磨いてあるもので、国分寺下層式に属するものである。須恵器では、ロクロ整形杯で底部は回転ヘラ切りで再調整のない5a類が出土している。これらはいずれも実年代を8c後半におくことができるもので、工房が使用された時期であると考えることができよう。覆土内の大多数の土師器は、国分寺下層式の丸底杯とロクロ再調整杯であり、羽口や鉄滓なども覆土に多数含まれていることを考えると、工房の使用終了後かなり早い時期に埋没してしまったことが考えられる。このことは9c初頭に属すると思われるSI 05にSX 01が切られていることから言えることである。

第9表 SX 01出土土器一覧表

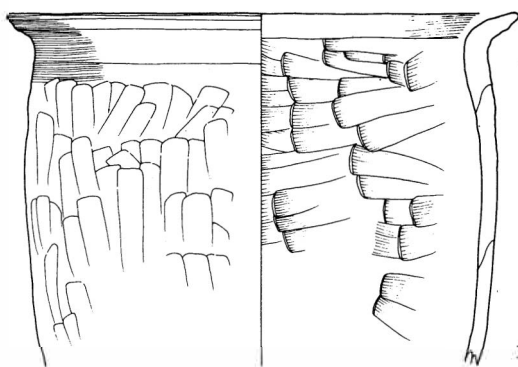
図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 単位cm						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
31	1	17-16	須恵器	杯		床 面	13.8			8.5	4.3			
〃	2		土師器	〃		ℓ-2	13.2				3.0			
〃	3		〃	〃		〃	16.0				4.1			
〃	4	17-14	〃	〃		ℓ-1	14.3				4.1			
〃	5	17-13	〃	〃		〃	13.6				4.5			
〃	6	17-10	〃	〃		〃	12.3			5.6	3.6			
〃	7	17-12	〃	〃		〃	14.3			6.6	4.1			「小」線刻
〃	8		〃	〃		〃	13.0			6.5	3.8			「小」線刻
〃	9		〃	〃		〃	13.0			6.4	4.3			不明線刻
〃	10		〃	〃		〃	13.8			7.0	4.2			「大」線刻
〃	11	17-4	〃	〃		〃	13.6			6.9	4.3			
〃	12		〃	甕		〃				10.0				木葉痕
〃	13		〃	〃		〃				8.4				木葉痕
〃	14		須恵器	壺		ℓ-3					9.0	0.8		
32	15		土師器	甕		ℓ-1	22.8	19.3	19.3					
〃	16		〃	〃		〃	27.0	23.8	24.9					
〃	17	17-15	〃	〃		〃	23.6	21.1						
〃	18		〃	〃		〃	26.4	22.0	23.6					
〃	19		〃	〃		〃	20.6	16.9						
〃	20		〃	〃		〃	15.8	14.2	14.9					
〃	21	17-17	須恵器	〃		〃	19.6	16.2	31.5					



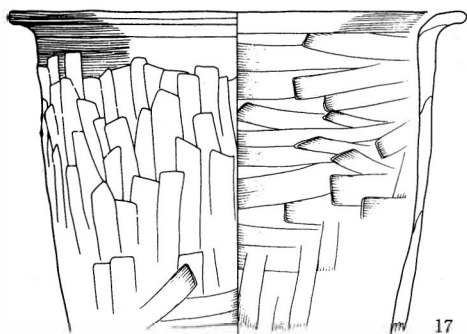
第31図 SX01出土遺物 1 床面出土 2~14 覆土出土 1 須恵器杯
 2~11 土師器杯 12·13 土師器甕 14 須恵器(縮尺 1/3)



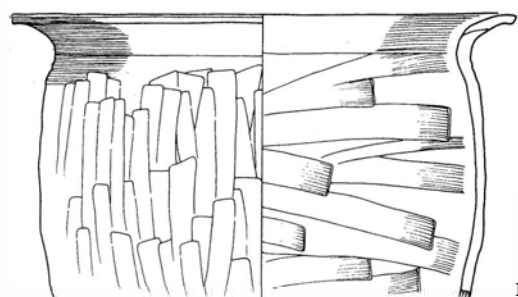
15



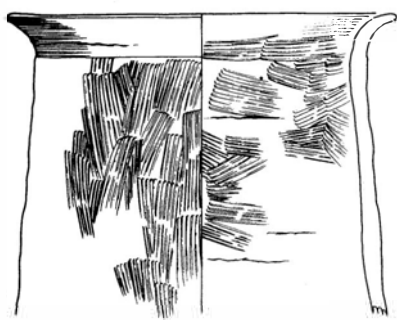
16



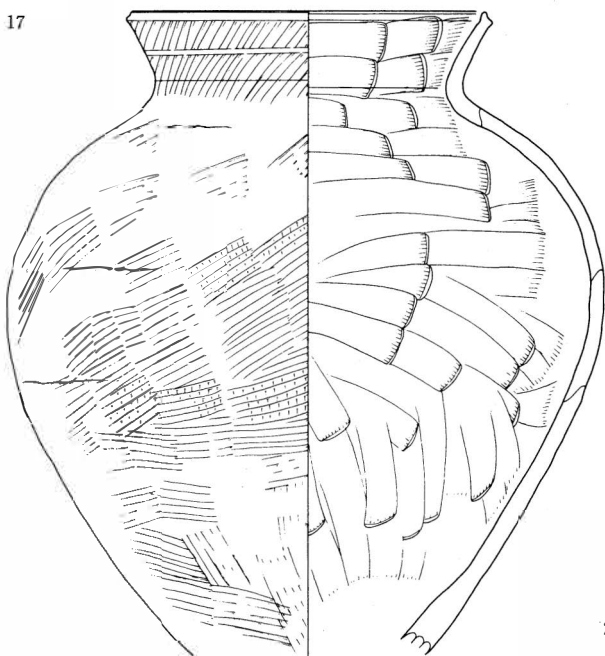
17



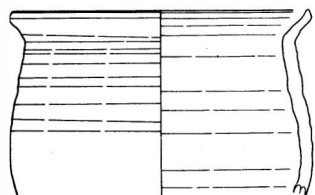
18



19



21



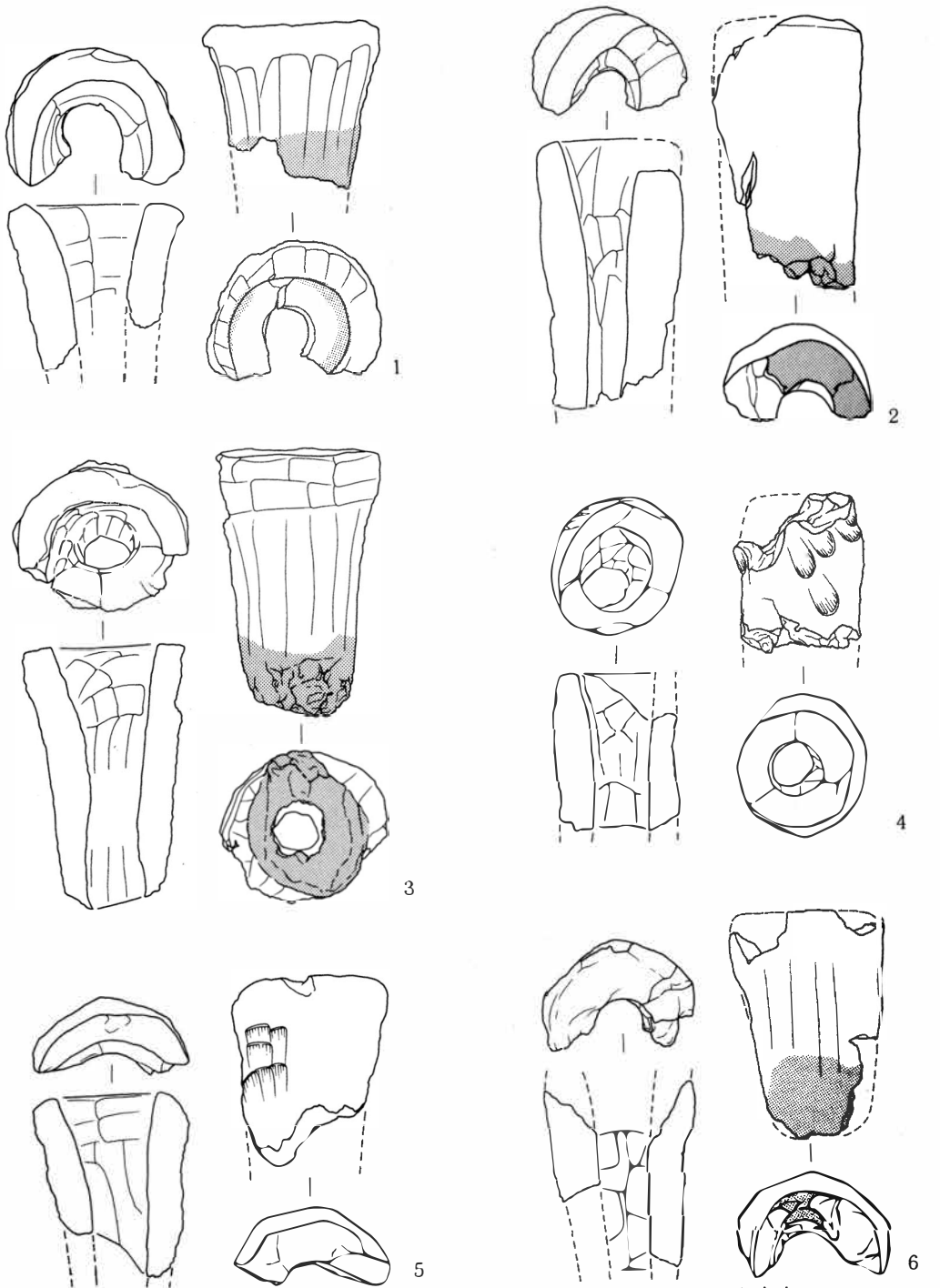
20

第32図 SX01出土遺物
21 須恵器甕

15~21 覆土出土

15~20 土師器甕

(縮尺 ¼)



第33図 SX01出土遺物 1~3 床直上層出土 4~6 覆土出土
 1~6 羽口

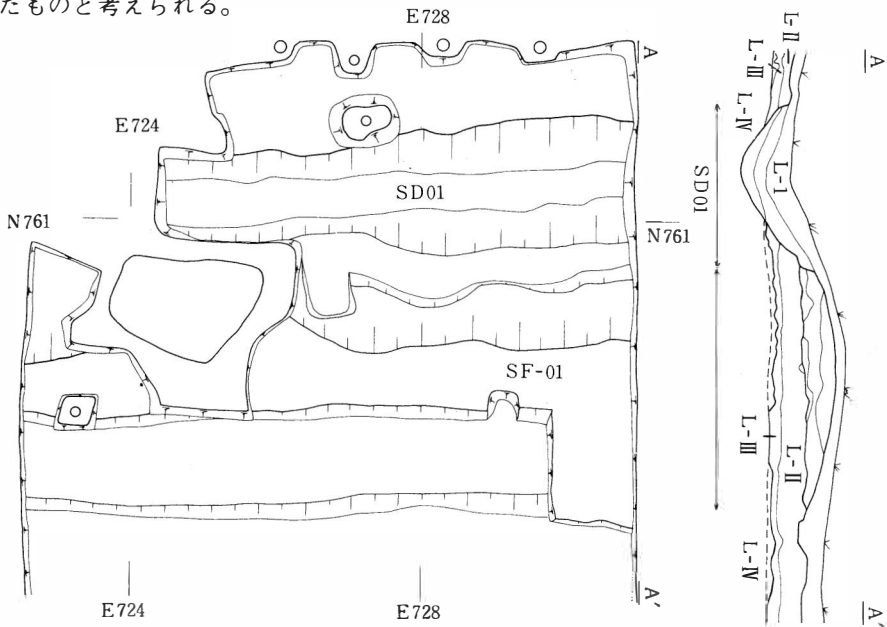
第4節 土塁・溝跡・井戸跡

SF01・SD01 (第34・35・36図)

関平郵便局の北約150mの北の林の中を東西88m、南北49mを「冂」形に走る土塁と、その外側に見られる溝跡である。この土塁は昭和45年頃には知られており、この土塁の内側の部分より奈良・平安時代の瓦・土器が出土しており、古代の施設の可能性が考えられ、今回の調査地点の選定の基になった遺構である。

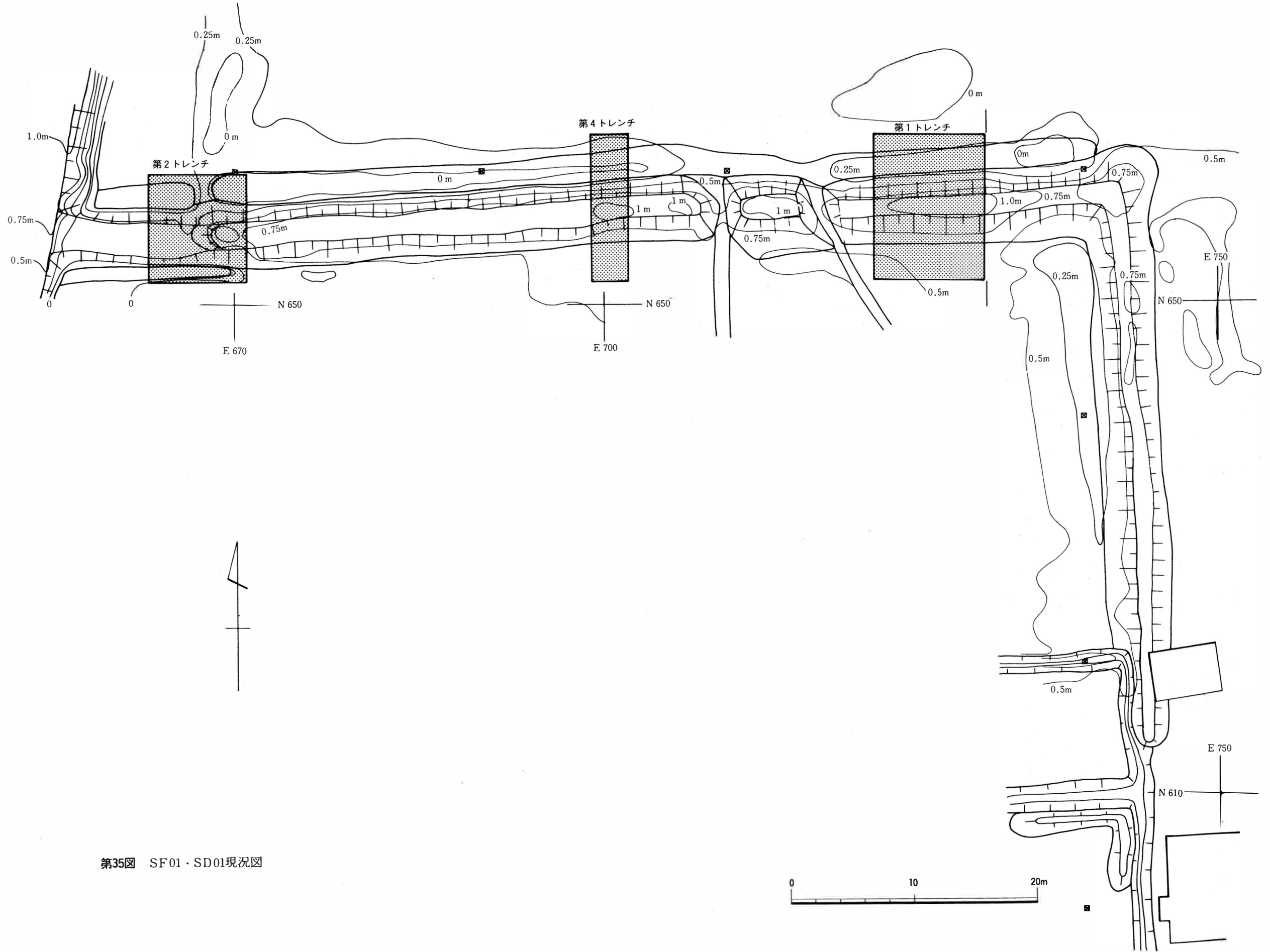
土塁の外見は基底幅5～6m、内側からの高さ約50cm、外側から約1mの高さを有する上面の丸い、ものとなっている。溝は東西に走る土塁の外（北側）に幅1～2.5mの浅い窪みとなって見られた。

調査地点は、土塁の東西に走る部分の東端部（第1トレンチ）、中央部（第4トレンチ）、西端部（第2トレンチ）の3ヶ所である。なお、この土塁は西端が水田で切られているが、西に延びていたものと考えられる。



- | | | | |
|--------------|------------------------------------|-------------------|--------------------------------|
| 自然堆積土 | | 土塁(SF01)積土 | |
| L-I 褐色土 | 粘性なし。パサパサで木の根を多く含む。(表土) | I-1 褐色土 | 粘なし、しまりなし。ローム粒・ロームブロックを斑状に含む。 |
| L-II 黒色土 | シルト質、粘性あり。均質で不純物を含まない(旧表土) | I-2 黒褐色土 | 粘性なし、しまりなし。ローム粒子が細かに入り込む。 |
| L-III 褐色土 | 漸移的に黄色が強くなる。粘性強い。ロームがやや腐植化した部分らしい。 | I-3 | I-2に類似するが、色調が褐色がかかる。 |
| L-IV 黄褐色土 | 地山、粘性極めて強い。均質。 | 溝(SD01)埋土 | |
| | | I-1 黒色土 | 粘性あり、L-IIに類似するが、ローム粒子が細かに入り込む。 |
| | | L-2 褐色土 | 粘性あり、ローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。 |

第34図 SF01 SD01(第1トレンチ)

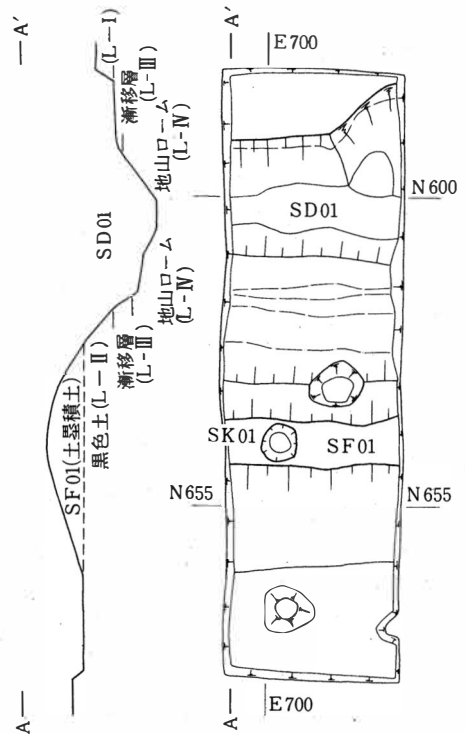


第35図 SF01・SD01現況図

S F 01土塁のある部分は地表下約1mで黄色ローム層(第Ⅳ層)に達する。その上に厚さ約20cmの漸移層(第Ⅲ層)、その上に厚さ約30~40cmの均質な黒色土層(第Ⅱ層)が来る。(第34図)

この第Ⅱ層までが自然堆積土であり、土塁は第Ⅱ層の上にローム混りの黒色土と褐色土で基底幅3.7~4.3m、高さ60~70cm程積まれており、断面は上面が丸くなだらかな形を呈している。

S D 01溝は、S F 01の北側に沿って検出された上幅2.6m、下幅30~40cm、深さ80cm~1mのもので、第Ⅱ層上面から掘り込まれ第Ⅳ層に達しており、土塁に接する側では第Ⅳ層上面で土塁沿に幅50~60cmの平坦面を作り、そこからさらに底面に向いている。覆土は自然堆積と考えられる黒色土(L-1)と褐色土(L-2)からなっている。なお、この溝は位置掘り込み面から考えて、土塁に伴うものであり、溝を掘った土をL-Ⅱ上に積んで土塁を作ったものと考えられる。



第36図 SF01 SD01(第4トレンチ)

S F 01の基盤で、S D 01の掘り込み面となっているL-Ⅱは第5トレンチではS I 05~07、S X 01を覆っており、これらの遺構はL-Ⅱの下から検出されている。したがって、今回調査地点の古代の遺構の覆土をL-Ⅱが覆っており、これらの遺構が廃絶した後L-Ⅱが堆積し、その後にS F 01、S D 01が作られている。これらの所見からS F 01、S D 01は古代の遺構とは直接関連は無いものと考えられる。

S D 02 (第37図第16図版)

第6トレンチ西半部より検出された上幅約5m、底幅約60cm、深さ約1.5mの溝跡で、中間に2つの段を有している。この溝の掘込見はL-Ⅱ上面であり、東壁の一部がS E 01に切られ、そこをさらにS D 02に切られているため、東壁の完全な立ちどりは不明である。

S D 03 (第37図第16図版)

S D 02の東壁を切てS D 02に並行して走る幅1.65m、深さ20~25cmの断面が皿状になる溝である。埋土は軟質で粘性のない黒褐色土一層である。

S E 01 (第37図第16図版)

第6トレンチでS D 02を切り、S D 03に切られて検出された素掘りの井戸跡である。直径約90cmの円筒形を呈し、深さは1.2m以上であるが出水が激しく、それ以上の掘り下げは不可能であった。

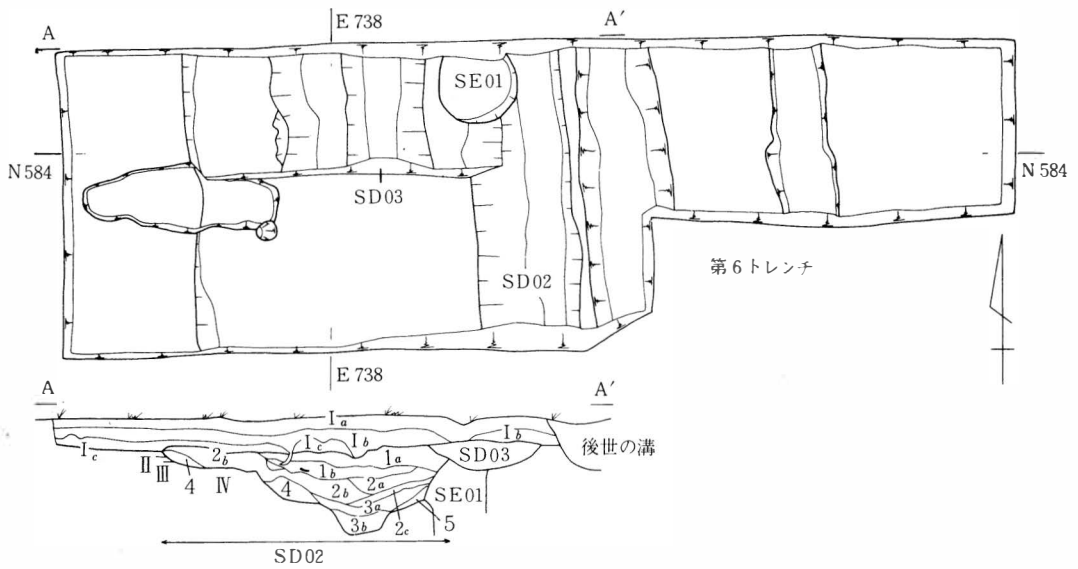


表 土

- I。層 黒褐色土 軟質、しまりなし。(現耕作土)
- I_b 層 軟質、ややしまりあり。ローム粒を含む。
- I_c 層 軟質、所々硬質ブロックを含む。

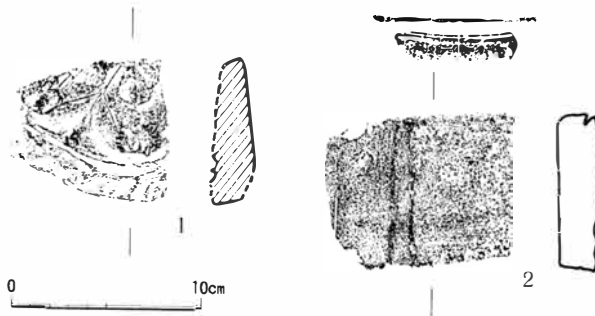
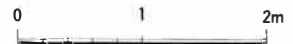
SD02覆土 黒褐色、やや軟質、ローム粒を若干含む。

SE01覆土 黒色土、粘性あり、しまりなし。ロームブロックを含む。

SD03覆土

- I。層 暗褐色土 軟質、やや粘性あり。ローム粒子、軟質ブロックを含む。
- I_b 層 I。層よりやや赤味を帯び、若干しまっている。
- 2。層 褐色土 やや硬質、ローム粒子と若干の炭化物粒を含む。
- 2_b 層 やや明るい色で、ローム粒が多く、炭化物を含まない。
- 2_c 層 やや軟質、しまりあり。若干のローム粒を含む。
- 3。層 黄褐色土 硬質、しまりあり。ローム小ブロックを多く含む。
- 3_b 層 やや砂味がかり、若干炭化物粒を含む。
- 4層 黄色土 やや軟質の粘性のあるロームブロック層。
- 5層 やや赤味がかるロームブロックよりなる層。

第37図 SD02・03・SE01(第6トレンチ)



第38図 SD02出土瓦 1 軒丸瓦 2 軒平瓦

第4章 考察

第1節 土器

今回の遺構出土土器は大きく2群に分けることができる。

1群はSX 01出土のもので、床面からは非ロクロ両面黒色の土師器蓋を出土している。これには須恵器杯5 a類(第31図1)を伴っている。覆土からは非ロクロの平底・無段丸底の杯、ロクロ土師器1・1 c類が出土している。この覆土はS I 05に切られており、したがってこの覆土出土の遺物も時間的に限定されたものといえる。

2群はロクロ調整の土師器杯を有するグループでS I 01～06がそれである。そのうち、S I 01～05はロクロ土師器杯1類を有するもので、S I 02では1 a類(第17図1)が見られ、S I 05では須恵器杯5 a類が伴っている。S I 06ではロクロ土師器杯4 b類が出土している。これらS I 01～05には見られないものである。そこで前者を2 a群、後者を2 b群としておく。

1群土器、すなわちSX 01のものは床面に出土のものについて見ると非ロクロ両面黒色の蓋がある点、須恵器杯5 a類が伴う点などからすると国分寺下層式の可能性が強いものである。さらにこの覆土はSX 01に切られており、後述するように2 a群は9世紀前半と考えられるものである。したがって、この覆土も国分寺下層式の年代である8世紀後半～末頃と考えられる。この時期と考えられるものに西白河郡大信村下原遺跡2号ピット(注1)、伊治城形土器(注2)などがあり、ともに非ロクロとロクロ調整の土師器杯が共伴しており、SX 01の覆土出土の土器と技法的に類似している。但し、床面の資料は少なく、また覆土のものは床面と同時期である証拠は無いので、今のところSX 01のもので床面の土器は国分寺下層式～下原2号ピット、伊治城形土器の時期(8世紀後半～末)、覆土のものは埋没時の混入の恐れもあるので、床面以後、S I 05以前すなわち8世紀末～9世紀初頭と考えておきたい。

2 a群の土師器杯はロクロ調整の1類で構成されており、これらについては表杉入式の古い時期と考えられ、ほぼ9世紀前半の年代が与えられている。今回の調査でもこれを覆えすような結果は出ていない。

2 b群としたものは資料数が少なく問題はあるが、土師器杯で4 b類が多く見られるようになるのは9世紀後半頃(注3)からであるので、これは9世紀後半～10世紀の年代が与えられるものであろう。

今回の調査で出土した土器は以上のようなものであり、その年代は9世紀前半が中心となり、その前後の時期が若干見られるというあり方を示している。

第2節 瓦のセット関係

従来の関和久遺跡の報告（福島県教委 1973. 3～1982. 3、泉崎村教委 1974. 12）を通じて本遺跡群出土の瓦のセット関係はかなり明らかにされてきている。これらの関係を先に述べた分類に基づき整理すると次のようになる。

1100、1101、1110軒丸瓦——1500軒平瓦——平瓦1 a、1 c、2類
1120、1121軒丸瓦——1520軒平瓦
1180軒丸瓦——1540軒平瓦——平瓦5類——丸瓦3類
1560軒平瓦——平瓦5類

また今回の集成を通じて若干のセット関係に関する知見を得た。まず複弁蓮華文を有する1100、1101、1110軒丸瓦は接合に際して丸瓦端部に縦方向の傷をつけ、接合の強化を計ることは先に述べた。図示はできなかったが、瓦当面から剝落した痕跡のある丸瓦1類の広端部にこの傷が見られ、丸瓦1類が複弁蓮華文軒丸瓦に伴うことは確実である。また関和久Ⅱ（福島県教委 1974. 3）ですでに指摘されているように1160軒丸瓦の丸瓦部は丸瓦3類に属するものである。一方、1500軒平瓦の平瓦部は第 図に示したように平瓦1 a、1 c、4類に属するものである。さらに1520軒平瓦の顎部の剝落した資料が穂積国雄氏の収集資料中に数点あり、それによると1520軒平瓦の平瓦部には3 a類が使われている。

以上の知見を総合すれば現在までのところ判明している本遺跡群のセット関係は下のようになる。

1100、1101、1110軒丸瓦——1500軒平瓦——平瓦1 a、1 c、2、4類——丸瓦1類
1120、1121軒丸瓦——1520軒平瓦——平瓦3 a類
1160軒丸瓦——丸瓦3類
1180軒丸瓦——1540軒平瓦——平瓦5類——丸瓦3類
1560軒平瓦——平瓦5類

ところで関和久遺跡関連の窯跡として知られる西白河郡矢吹町かに沢窯跡における所見(注4)によると（福島県教育委員会、1977. 3）1500軒平瓦と平瓦1、3 a類は共伴するか、きわめて接近した時期のものとされている。従って上述の関係から言えば1100、1101、1110軒丸瓦及びこれとセットになる瓦群と1120、1121軒丸瓦及びこれとセットになる瓦群とは共伴ないし、接近した時期のものと解し得るであろう。一方、丸瓦3類及び平瓦5類を媒介すれば、1160、1180軒丸瓦、1540、1560軒平瓦が一つのグループとして考えられるように思われる。

前者のグループは少なくともかに沢窯跡住居跡の示す時期、すなわち8世紀前半代にはすでに存在しており後者はやや時期の降るものであろう。

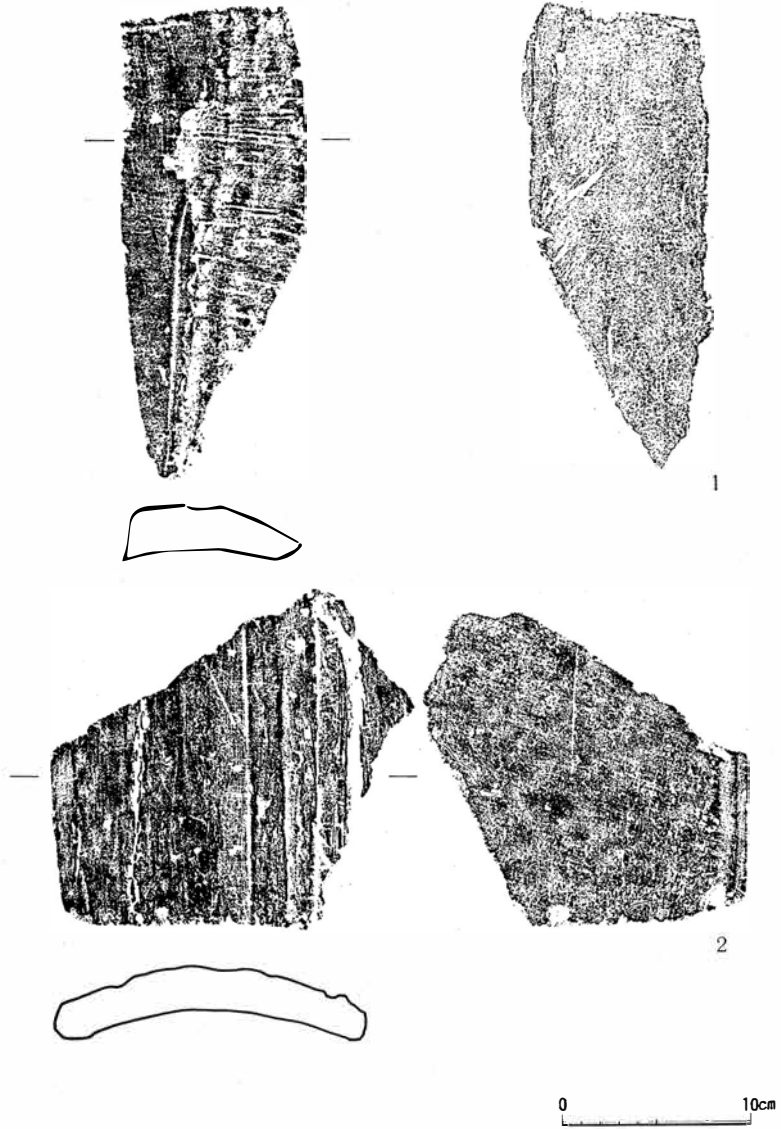
第3節 凸面布目瓦の製作技法について

本遺跡群の平瓦2類は一般に凸面布目平瓦と呼ばれるものである。この種平瓦の製作技法については現在のところ凹型を用いた一枚造り説(奈良国立文化財研究所 1960. 3 佐原真 1972^(注5) 京都大学考古学研究会 1982. 11^(注7))と桶の内巻き作り説(進藤秋輝 1976. 10 大脇潔 1881. 7^(注8))の2者があり、結論が出ていない。今回の整理作業を通じてこの種平瓦の製作技法を考える上で重要な知見を得たので若干の検討を加えてみたい。

第39図1に示したものはS I03の覆土から出土したもので、残存する凸面の約半分程が破面になっている。この破面には横走する微隆起線が多数観察される。この痕跡は粘土板を切り取る際に生じた糸切り痕跡が反転した状態と理解され、この部分が粘土板の合わせ目と考えられる。この合わせ目の端部には粘土を接着させるための強いナデつけをした痕跡も観察される。このような痕跡は図に示したものの以外にも認められるものである。

第39図2は関和久遺跡第5次調査で遺構確認面から出土したもので、凸面の布目が良く残っている。模骨痕の上には2種の痕跡が観察される。一つは縦1列に並んだ、いわゆる釘頭状の痕跡であり、他の一つは紐状のもの、の圧痕である。釘頭状の痕跡に粘土を押しあて、反転した状態で観察すると(第40図3)布の下から糸が出てきていったん布の上に出、また布を通して下にもぐっている状態が観察され、この痕跡は模骨上に布を糸で留めたものであることが知られる。糸は布を留めた部分でのみ観察されるため、模骨の細板に小孔をあけ、糸は小孔を通して裏にまわされていると考えられる。一方紐状の圧痕は良く見ると2本の糸が布と細板の間及び布と粘土との間を交互に出入りしている状態であることが判る。さらにこの痕跡の左右の布目に若干のズレが見られる。従ってこの痕跡は布の綴じ合わせ痕と判断される。

以上の観察結果から、平瓦2類の凸面に圧痕として残されている布は模骨の細板に穿たれた小孔に糸を通して模骨上に留められており、両端はやはり糸によって綴じ合わされていること及び瓦製作にあたって粘土板を使用し、その両端は合わされていることが判明した。従って少なくとも本遺跡群の凸面布目平瓦については一枚作り説は成立し得ない。現状でこれらの痕跡を最も矛盾なく説明し得るのは桶型の内側に粘土板を巻きつけるという進藤氏の解釈(進藤 1976. 10)であろう。ただ進藤説においても実際に粘土板を桶型に巻きつける作業が困難であるように思われ、若干の疑問が残る。今後検討していきたい。



第39圖 平瓦第2類拓影

第4節 遺構とまとめ

第10表 遺構別瓦組成

今回の調査では竪穴住居跡7基、工房跡1基、掘立柱建物跡1基、井戸跡1基、土塁1条、溝跡3条を検出した。

竪穴住居跡はS I 01～05が9世紀前半のもので、S I 06が9世紀後半～10世紀と考えられる。竪穴住居の規模はプランの判明したものはほぼ整った方形のプランで一辺が3.5～4.1m、床面積が約12～17㎡のものである。近辺のこの時期の集落跡と比較すると、西白河郡東村谷地前C遺跡、西原遺跡^(注10)などでは10㎡以下のものや、20㎡を越すものもありかなりバラツキが見られる。表杉入式期の集落の竪穴住居跡は一般的には30～6㎡にバラツキが見られ、形の崩れた

		丸瓦			平瓦										
		1類	2類	3類	1類			2類	3類				4類	5類	
					a	b	c		a	b	c	d			
S I 01	床面														
	覆土	1		1	1			2							1
S I 02	床面	1													
	覆土	2						2							1
S I 03	床面														
	覆土			1		1	1	1							2
S I 04	床面														1
	覆土								2						
S I 05	床面	2						1		1					
	覆土	4		3		2									
S I 06	床面							1							
	覆土							1							
S I 07	床面														
	覆土														
S X 01	床町														
	覆土	3			1	2									7
SE 01		1													
SD 01															
SD 02								1							
SD 03								2							
表	土	12		1	6	3	16	11	6		1	1			10

※床面にはカマドも含む



1



2



3

第40図

ものもあるが、今回検出されたものは、それらに比べ比較的まとまりがあるものといえる。

また、S X 01のような複数の炉跡を有する工房跡が検出されたのは近くでは秋田城跡、鹿の子C遺跡(注12)など例が少ないが、特別の遺跡でのみ現在のところ発見されている。
(注13)

竪穴住居跡に瓦が多く用いられている点については近くに瓦を出土する地点があり、そこより共給されたものである点はほぼまちがいないと思われる。

以上の竪穴住居の規模が比較的まとまっており、カマドには瓦が多く用いられている点、特殊な工房跡等を伴う点、また灰釉陶器の浄瓶のような特殊な遺物を出土する点など、周辺の同時期の集跡とは性格の異なった古代の遺構群であるといえる。

掘立柱建物跡は古代の竪穴住居跡の覆土を覆う黒色土(L-2)上から掘り込まれており、その柱配置等から中世～近世のものと考えられる。

土塁(S F 01)とそれに伴う溝(S D 01)について見ると、S F 01はL-2の上に積まれ、S D 01はL-2を切っており、ともにL-2より新しいものといえる。土壌分析の結果からこのL-2とS I 05～07、S X 01を覆い、S B 01に切られているL-2は同じものといえるので、このS F 01・S D 01も古代の遺構群よりは新しいものであると考えられる。遺構面との関連からするとS B 01との関連が強いものといえよう。

注1 木本元治「下原遺跡7号ピット出土の土器」『しのお考古』7 しのお考古学会 1978

注2 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ 宮城県多賀城跡調査研究所 1980

注3 福島県教育委員会「東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅳ―御山千軒遺跡―」 福島県文化財調査報告109集 1983

注4 福島県教育委員会「かに沢窯跡」『関和久遺跡Ⅴ』付章 1977. 3

注5 奈良国立文化財研究所「川原寺発掘調査報告」 1960. 3

注6 佐原 真 「平瓦桶型作り」 考古学雑誌 第50巻2号 1970

注7 京都大学考古学研究会「播磨繁昌廃寺調査報告」『トレンチ』34 1982. 11

注8 進藤秋輝 「東北地方の平瓦桶作り技法について」『東北考古学の諸問題』1976. 10

注9 大脇 潔 「古代造瓦技術に関する一考案 ―凸面布目瓦の製作技法を中心として―」 奈良国立文化財研究所第50回公開講演会資料 1981. 11

注10・11 福島県教育委員会 (財) 福島県文化センター「谷地前C遺跡」「西原遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告書』 福島県文化財調査報告書第85集

注12 秋田市教育委員会「秋田城跡」『昭和56年度秋田城跡発掘調査概報』 1962

注13 茨城県教育財団「鹿の子C遺跡」 1981

付 章 福島県泉崎村関和久上町遺跡土壌の分析結果

東北大学農学部 庄子貞雄 山田一郎

分析方法

鉍物分析用の試料は、篩で0.1mm以上部分を篩別し、ついでに遊離の酸化物を除去した後0.1—0.2mm部分と0.2mm以上部分とに篩別した。次に、0.1—0.2mm部分につき、テトラブロムエタン(比重2.96)で重鉍物部分と軽鉍物部分に分離した。重および軽鉍物部分の鉍物組成は、それぞれ200—300粒を偏光顕微鏡で検鏡し決定した。

実験結果

分析は、第1トレンチ土壘下黒土層(L—II、試料No.、No.1)、第5トレンチ表土(L—I a、No.4)、同黒土(L—II、No.5)、同漸移層(L—III、No.6)、同地山ローム(L—IV、No.7)について行った。

第1表には土壌の土性(粒度組成、触感)、0.02mm以上部分の軽石含量(肉眼観察)、腐植含量、土色(標準土色帳による)をしめした。

No.1、No.4、No.5はともに多量の腐植を含んでおり、土色は7.5Y R¹/₂と黒味が非常に強い。

No.6は上位層より腐植含量は少なく、土色も7.5Y R²/₂とやや黒味が強い。No.7は、腐植はほとんど含まれておらず、土色も7.5Y R³/₂と褐色である。

土性はNo.1、No.4、No.5はCL、No.6はLic、No.7はHCであり、No.6とNo.7とくにNo.7が粘土含量が高く、土壌の風化が進んでいる。0.2mm以上部分の軽石はNo.5とNo.7に多く含まれている。No.1にも比較的多く軽石が含まれている。No.2とNo.6は他に比べ軽石含量は少ない。

第2表には、第1表の土壌から分離した0.1—0.2mm部分の鉍物組成を示した。各試料の重鉍物含量は26—45%と、全試料ともその含量は高い。重鉍物組成は、No.1、No.4、No.5、No.6ともシソ輝石、磁鉄鉍を主体とし少量の普通輝石と角閃石を含んでいる。No.7は他に比べ、角閃石と磁鉄鉍含量が少ない。

軽鉍物組成は、No.1、No.4、No.5、No.6は斜長石>火山ガラス≧風化粒である。この中でNo.5はとくに斜長石含量が高い。No.7は火山ガラス含量が最も高く、ついで斜長石、風化粒の順である。いずれの試料にも少量の石英が含まれ、またNo.1、No.4、No.6には黒雲母が含まれている。

考 察

この遺跡土壌の母材は0.2mm以上部分に軽石をかなり含んでいることが多いこと、軽鉍物部分に火山ガラスが多いことなどから、火山灰を主体としていと考えられる。とくに第5トレンチのNo.5(L—II、黒土)とNo.7(地山ローム)は軽石を主体としているが、このNo.5の較石は、福

島県西郷村や栃木県那須町で認められるアワ砂様の軽石層に対応すると思われる。

次に、第1トレンチと第5トレンチのL-IIについて検討してみる。両トレンチのL-IIが認められる断面は、きわめて類似した土壌断面から成る。また両トレンチのL-IIの重鉱物含量と重鉱物組成は同様の結果である。ただし、軽鉱物組成は第1トレンチのL-IIで風化粒が多く、第2トレンチともので斜長石が多い。これは、0.2mm以上部分の軽石含量からも明らかのように、第1トレンチのL-IIは第5トレンチに比べて上下層との混合が進んでいるためと思われる。以上のことから両トレンチのL-IIはほぼ同じ母材から成るとみてさしつかえない。

第5トレンチのL-IとL-IIの土色をより詳しく観察するとL-IIの方が黒味が強く、L-IIはこの断面の中で最も多量に有機物を集積している層である。このことは、この層が長期間表層にあったことを示している。また、L-Iは第5トレンチのL-Icにローム粒を含むことから崩積土である可能性が考えられる。

結 論

鉱物分析を行った試料は母材がすべて火山灰を主体とする土壌であることが判明した。第1トレンチと第5トレンチのL-IIは同じ火山灰が風化してできた土壌とみられる。またL-IIは長期間表層風化したため、多量の有機物を集積しているのが特徴的である。

第1表 土壌の性質

サンプル名	土性	0.2mm以上部分の軽石	腐 植	土 色
第1トレンチL-II (No.1)	CL	含む・富む	すこぶる富む	7.5YR 1%
第5トレンチL-Ia (No.4)	CL	含む	〃	〃
〃 L-II (No.5)	CL	富む	〃	〃
〃 L-III (No.6)	LC	あり	富む	7.5YR 2%
〃 L-IV (No.7)	HC	富む	あり	7.5YR 2%

第2表 土壌の鉱物組成 (0.1~0.2mm部分中)

サンプル名	重鉱物組成 (粒数%)				軽鉱物組成 (粒数%)					重鉱物含量 (W+%)
	シソ輝石	普通軽石	角肉石	磁鉄鉱	斜長石	石 英	火山ガラス	黒雲母	風化粒	
第1トレンチL-II (No.1)	49	11	11	30	49	1	25	1 >	27	30
第5トレンチL-Ia (No.4)	54	5	8	33	41	3	33	1 >	32	26
〃 L-II (No.5)	47	6	10	37	73	2	20		6	36
〃 L-III (No.6)	53	10	4	33	42	2	37	1	19	45
〃 L-VI (No.7)	66	16	1	17	20	1	67		12	39

伊賀館跡

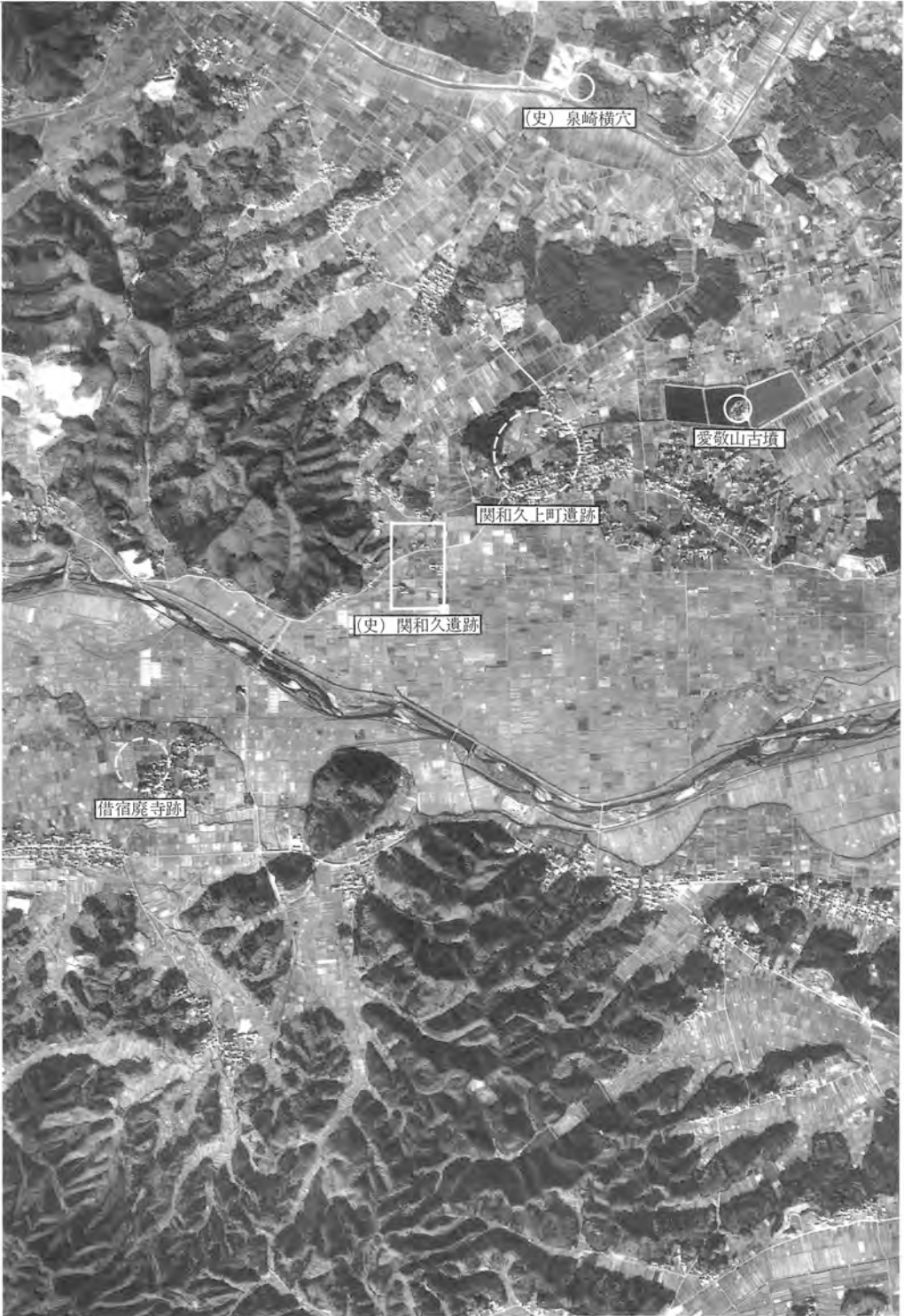
関和神社下

高福寺跡

上町

土塁跡





第1図版 遺跡周辺航空写真



第2図版 遺跡近景



第3図版 SF01・SD01
(コーナーより西方)



第4図版 SF01
(第1トレンチ東より)



第5図版 SI01~04
(第3トレンチ南より)



第6図版 SI01
(南より)



第7図版 SI01
(浄瓶出土状況)

第8図版 SI02
(南より)

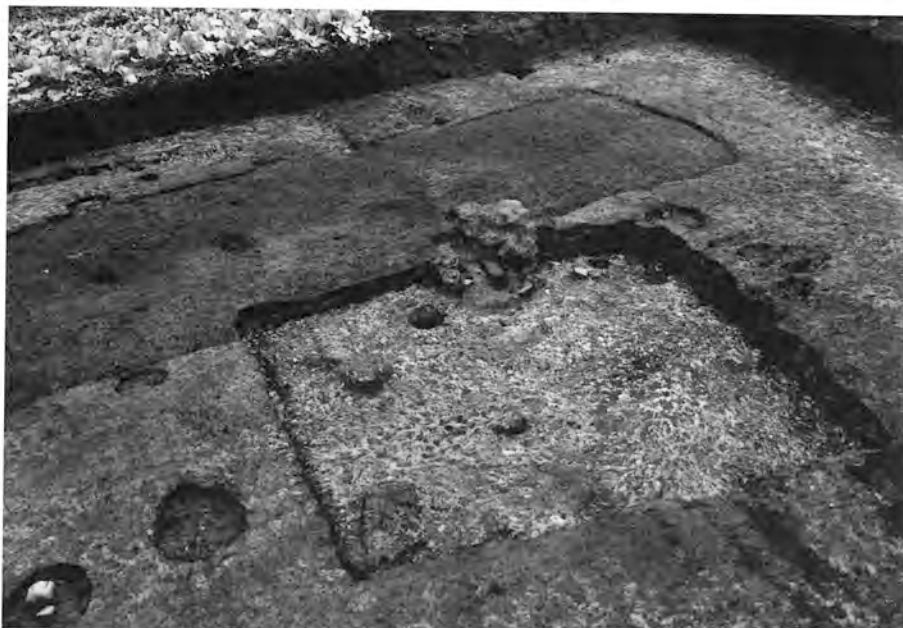


第9図版 SI02
(カマド遺物出土状況)



第10図版 SB01・SI05
(北より)

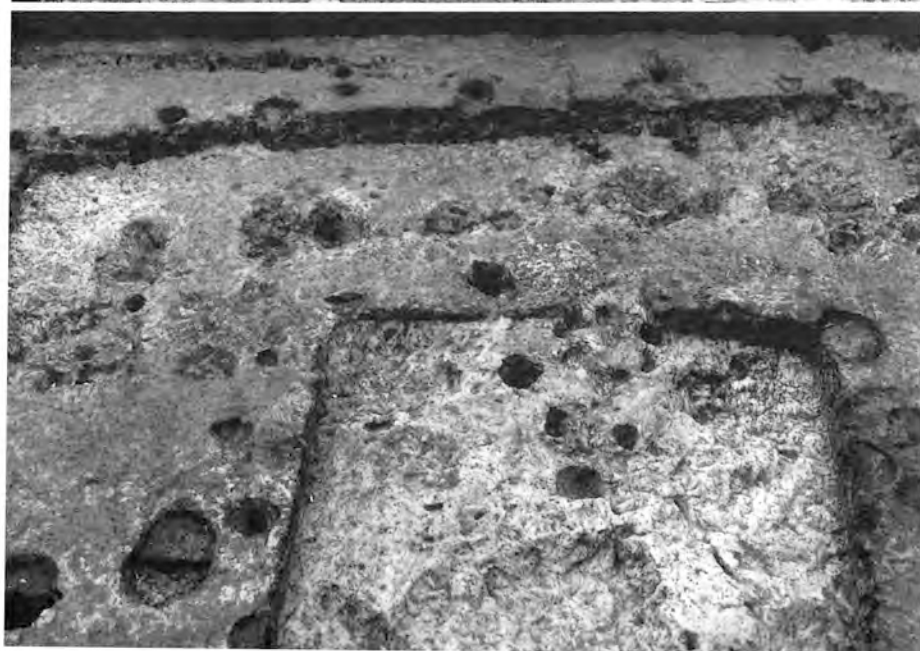




第11図版 SI05・SX01
(南より)

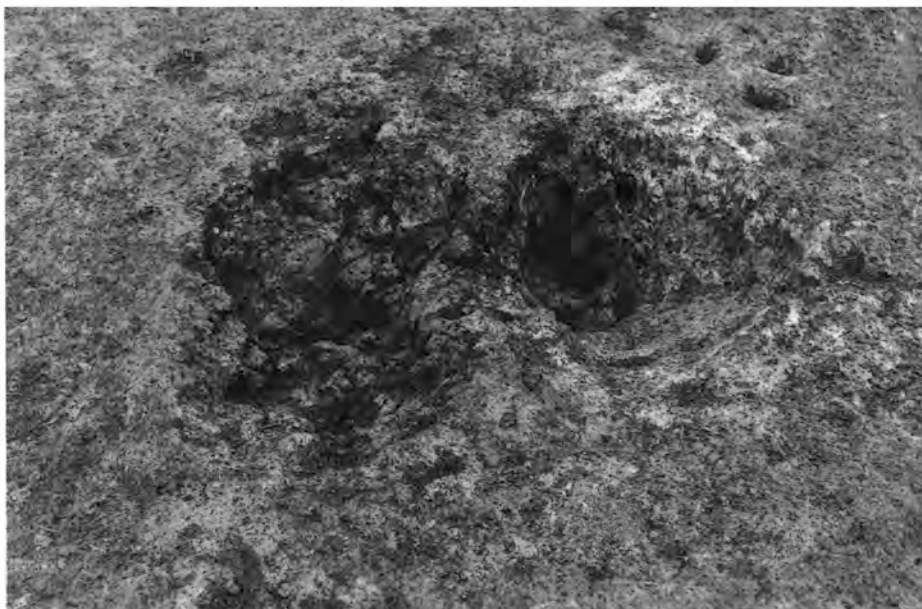


第12図版 SI05
カマド (南より)

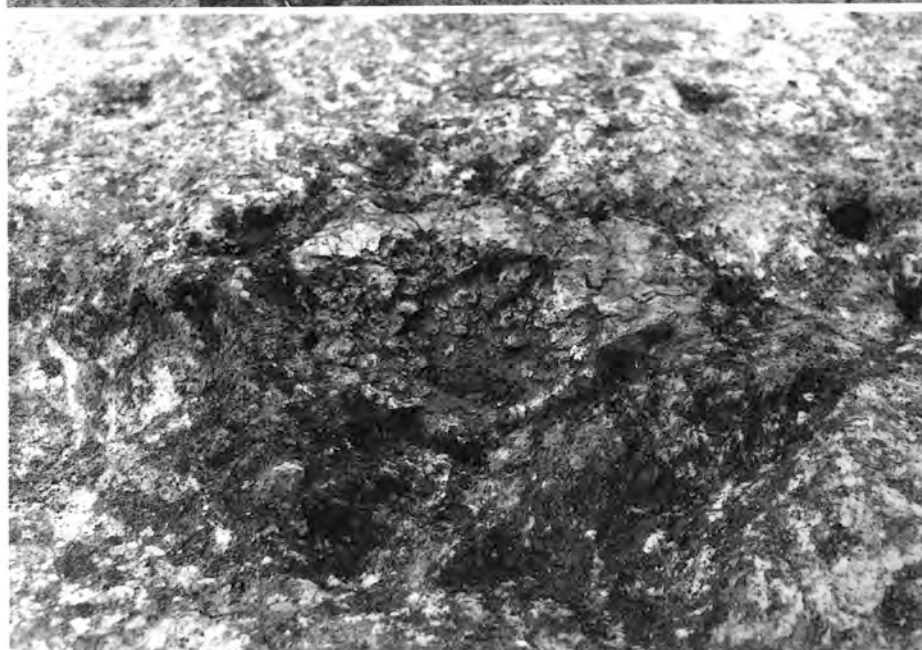


第13図版 SX01・SI05

第14図版 SX01-P₂

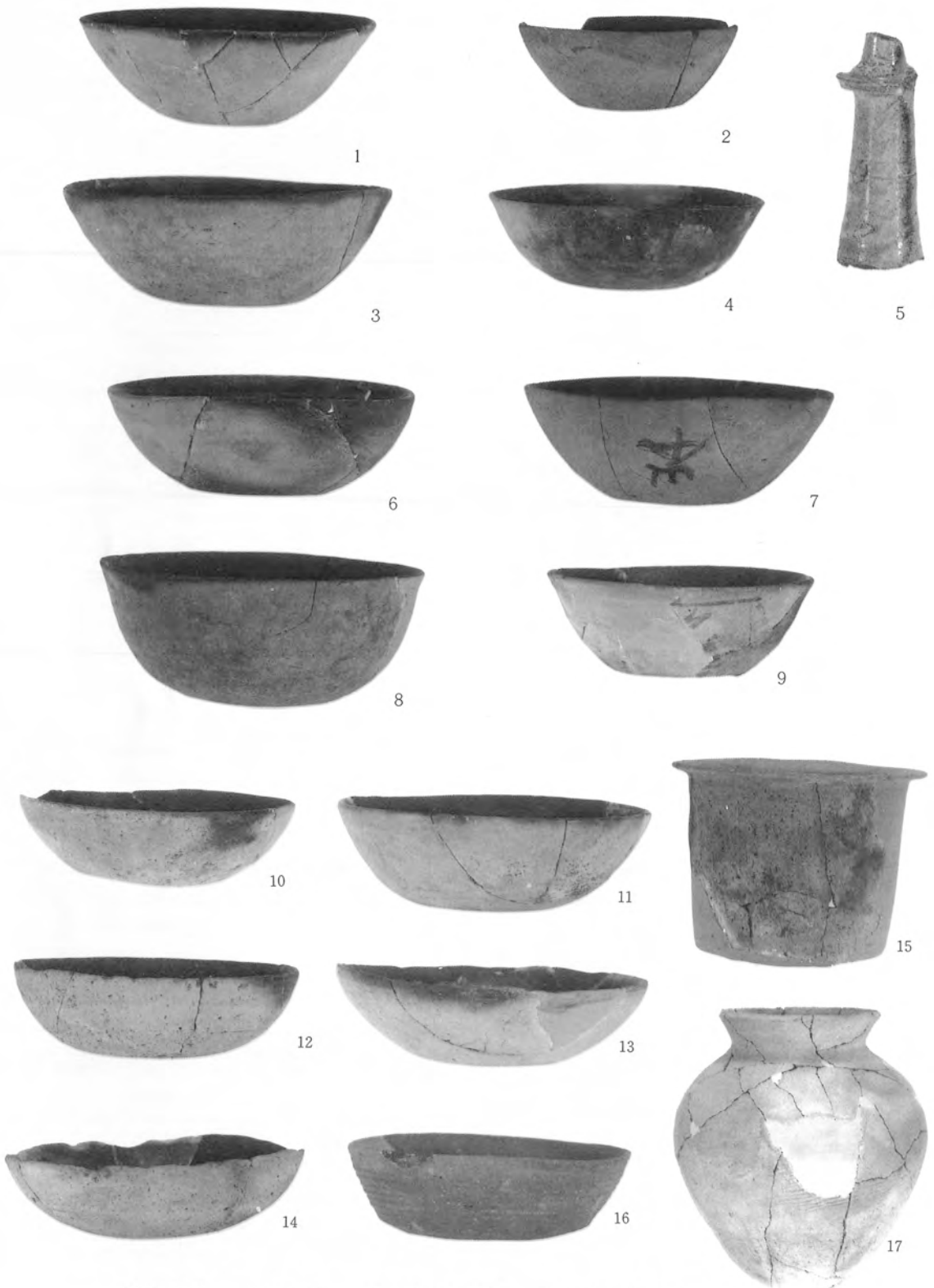


第15図版
SX01-P₄b 断面



第16図版
SD02·03·SE01





第17図版 出土土器

1~5 SI 01 6・7 SI 02 8 SI 03
 9 SI 06 10~17 SX 01
 5 灰釉陶器 16・17 須恵器 他は土師器



1100



1101



1110



1102



1111



1120



1122



1121



1150



1140



1151



1160



1180



1500

1500



1500

1500



1520

1540

1560

第20図版 軒平瓦

福島県文化財調査報告書第110集

関和久上町遺跡Ⅰ

史跡指定調査概報

昭和58年3月

編集／福島県教育庁文化課

発行／福島県教育委員会

〒960 福島市杉妻町2-16

印刷／六陽印刷(株)
